



オーダー

- 封印の鳥籠 -

## 登場人物紹介。

---

### 登場人物

カナリー 幼い頃に、怪物に両親を殺害された女。黒いシャギーの髪をしている。

ベレト 能力 マスター・ウィザード

ウエディングドレス風の白いドレスの上に、黒いビスチェを羽織った猟奇殺人鬼の美青年。  
脚元まで伸びた白に近い金髪に、透き通るような蒼い瞳をしている。  
若い女を解体し続け、自身の住まう塔に作品と称して展示している。

.....

ドーン中枢メビウス直属、栄光の手のメンバー

ゴードロック 能力 リトル・プリンス

元軍人の男。

今も、軍服姿に身を包んでいる。

花鬱(かうつ) 能力 邪魅曼荼羅(じゃみまんだら)

長い黒髪に、赤い和服に身を包む、三、四十代くらいの女。

オブシダン 二十代後半の人形作家の女。

ミキシリグ 巨体で太った男。

テラリス やせ細った男。

.....

コペリア 人形作家。メビウスの身体の予備を作っている。

ダウンナンバー 巨大なカメレオンの姿をした怪物。過去にカナリーの両親を殺害している。

メビウス・リング 能力 ウロボロス 人間サイズの球体関節人形の身体を持つ女。

能力者組合『ドーン』の中枢であり、創設者。

デス・ウィング 能力 ストーム・ブリンガー

闇の骨董屋。各地に危険な品物を売っている女。

くすんだ金色の髪に、長身の美女。

性格は悪意に満ちており、人間の闇を覗き見る事を激しく渴望している。

フルカネリ 錬金術師。数百年前にメビウスを創造した両性具有の能力者。

メビウスは、彼であり、彼女である、この存在を追い続けている。

## # 001 栄光の手

---

幼い頃から、自分は呪われていた。

カナリーは、決意して、その場所へと向かう事にした。

きっと、此処から引き返せなくなるのだろう。

路地裏の奥を進んでいくと、巻き貝のように、螺旋階段が目立つビルが見つかった、高いビルだ。この先に例の人物がいるのだろう。その人物は彼女に興味を示してくれた。

彼女は階段を登っていく。

くるくると、街全体が俯瞰出来るようになっていた。

この街は都会で、田舎を故郷に持つ彼女にとっては、目まぐるしいものがとても多かった。日陰で生きていた自分にとっては、とてもカラフルに見えた。

彼女は全身、漆黒の服に身を包んでいた。黒い編み込みの入ったワンピースに、黒いブーツ。黒いネック・コルセット。ワンピースの下は黒いパニエと黒いドロワーズ、ドロワーズの下には黒いショーツをはいていた。そして髪の色も、カラスの濡れ羽のように黒かった。ボブにシャギーを入れた短めの髪だ。彼女は黒が好きだった。自分自身の内的世界を一番、表現しているような色彩に思えたからだ。

彼女は、黒い布に包まれている、ソレを、今から会う人物に見せなければならない。

彼女の全身もまた、黒尽くめだった。

黒いドレスを纏っていた。

幼い頃から、自分は光の世界で生きられないのだと気付いていた、だから、この服はカナリーにとっての自己主張だった。

彼女はビルの頂上に辿り着く。

そして、ドアを開ける。

中には、闇ばかりだった。

少しだけ、日の光よりは心を和らげてくれる。

「あの……………」

確かにいる筈だろう。

しばらくして。

窓が開けられる。

光が刺し込み、その人物は少しだけ輪郭を露わにする。顔はよく見えない。そもそも、気配がまるで無かった。

「この先に椅子がある。座れ」

女の声だ。冷たく、無感情だ。抑揚がまるで無い。

カナリーは恐る恐る、部屋の中へと入る。そして椅子を見つけて腰掛ける。

これは“面接”なのだ。

彼女の受け答えによって、これから先の未来が変わるかもしれない。

「お前の言う例の物は持ってきたのか？」

「はい……。というよりも、いつも肌身離さず、持っています」

「見せろ」

カナリーは、硬い机の上に、黒布に包まれたものを置く。彼女は黒布を取った。

「ふむ。成る程な」

光によって、次第に、目の前の人物の全身が現れていく。

暗闇の中に、整った金色の顔の女がいた。どうやら、彼女もまた、闇に溶けるように、漆黒のドレスを身に付けているみたいだった。髪の毛は螺旋のように巻かれている。

黒いドレスを纏った二人の女は、互いを見つめ合う。

「お前の名は？」

「カナリーと言います」

「そうか。私はメビウスと言う」

彼女は手にしたものの布を取るようと言われる。

布を取り去ると、そこから出てきたものは、鳥籠だった。大型の鳥も入れられそうな木製の鳥籠……。扉は硬く閉ざされている。

「貴女が“中枢”だと私は聞かされて、来ました。貴女自らお会いして下さいと……」

「私の眼で見る必要があったからな」

“力を持つ者達”の組織を束ねる女、メビウス・リング。

彼女は、人間大の球体関節人形の身体を持つ、動く人形だ。そして、絶対的な、この世界において実力者でもある。

メビウスはカナリーの全身を冷たい視線で眺めていた。感情は分からない、いや、そもそも無いのかもしれない。

無機質な顔のまま、メビウスは口を開く。

「問うが。お前はこれから先、どのような不幸も覚悟の上か？」

「はい。理解しているつもりです」

「苦難の道を歩む事になるかもしれないぞ。お前は簡単に命を落とすかもしれない」

「覚悟の上です」

「お前は、お前自身の力を、どのように理解している？」

「使命です……………」

メビウスは表情を微動だにしない、代わりに、カナリーは脂汗を流していた。

表情を持たない相手が、こんなに怖いとは思わなかった。

「人を殺した事はあるか？」

「……………、あります。私の力で」

「お前はお前自身の力に名を付けているか？」

突然、意表を突かれた。カナリーは困惑する。

「無いです、……………力は力としか……………」

「物事には名前が存在する。万物のあらゆる事象には名が存在するのだからな。だから、お前は  
お前自身の力に名を付けるべきだ。この世界においては、お前のような力を、個々が好きなよう

に名付けている。お前が私達の領域に入った後、最初の仕事は、お前自身の力に名を付ける事か  
もしれんな」

メビウスは鳥籠をまじまじと眺めていた。

これが極めて、危険な物体なのだと、彼女は理解しているみたいだった。

それが分かっている故に、価値があるのだと、彼女は考えているのだろう。

そして、彼女は判断を下したみたいだった。

「合格だ。お前は私の下で動け」

カナリーの顔が、少しだけ紅潮する。胸が高鳴っていた。

「お前が仕事を一つこなす度に、給料を送ろう。指令は私ではなく、別の者を使う。早速だが、  
このファイルに目を通して貰おうか」

渡された黄色い封筒の中には、特別任務を行う組織『栄光(ハンド)の(・オブ・)手(グローリー)』  
の行うべき事が書かれていた。

十

「絶滅収容所跡地を店舗に使っている奴は初めて見た」

フードによって、頭をすっぽりと包んだ男は、楽しげにそいつを見ていた。

小柄だが、異様なまでの威圧感を放っていた。

元は青かったが、灰に近い薄汚れたニット服に、色褪せた長ズボンを身に付けた店の主の名は  
デス・ウィングといった。長い髪に、胸と腰の大きな体型の女だった。汚らしい服装は、まるで  
自身の容姿を嫌っているかのような印象を受けた。

デス・ウィングは、長くて汚い金髪を弄っていた。

「人間では無い者達が、よく此処に来ますからね。そういう方達が好むような場所が結構、お客  
様を呼ぶんですよ。彼らは血と死の匂いを欲するから。……貴方と同じような。ああ、でも、他  
の場所でも、フリーマーケットに使われたりするんですよ。共同墓地とか、地下教会とか、ほら  
、此処のように沢山の者達を虐殺した場所とかを。店を作る土地は、店の主のセンスが試されま  
すからね」

彼女は唇を歪めていた。新しい客が、何を手に取るのか、興味深そうにしていた。

「それで、何をお求めで？」

「骨が欲しい」

「骨、ですか？」

「俺は骨の収集家だ。あらゆる生物の骨を手に入れているし、あらゆる職業や階層の奴らの骨を  
自室に飾っている」

彼の二つの眼は真摯だった。

「欲しい骨とは？」

「病原菌に感染した骨だ。それでナイフを創る」

「そうですか。では、xxxの都市を食い荒らしたウイルスを補完した瓶とかはどうですか？ 犠牲

者の死体の部品入りですよ」

「良いな。それが欲しい。骨は付いているんだろな？」

「ええ」

店の奥には段ボールが積まれていて、内装も整えている最中だ。つい、最近、此処に引っ越して、商売を始めた、といった趣だった。

フードの男は、店の中で幾つかの品物を物色すると、それをカウンターへと持っていく。

目当てのモノが見つかり、しばし陶醉しているみたいだった。

デス・ウィングは、ふと、気まぐれを起こす。

「貴方のストーリーに興味を湧きました。私も近くで観ていていいですか？」

「ほお」

男はとても楽しそうだった。

「闇の骨董屋。お前程の者が、俺ごときに興味を持つのか？ それは至極冥利に尽きる」

「ええ、楽しいものが観れそうですから」

店の主は、心の中にある黒い感情を、まるで隠そうともしていないみたいだった。

男はカウンターに、数枚のカードを置く。

それは絵柄こそ違おうが、全てが死神を暗示するタロットのカードだった。

「名刺代わりだ」

「ありがとうございます。でも、これ、売り物にしていいですか？ 血の匂いがするので。欲しがる人がいそうだ」

「……失礼な奴だな。まあいい、好きにしろ、高値が付くかもな」

彼は、特に、気分を害する事もなく、どちらかという、半ば上機嫌のようだった。

男が店から出ていった後、彼女は死神のカードを眺めていた。

どのカードにも、ベレットという名が書かれていた、彼の名前なのだろう。

職業も書かれている。

怪盗、ベレット、と……。

十

メビウスからの最初の指令は、美術品泥棒の始末だった。

その泥棒を追うと、色々な者達が振り返りにあっているみたいだった。警察の者達も、何名も命を落としている。

美術館や博物館などに忍び込んで、特定の美術品を盗んでいく。

それが、怪盗ベレットだった。

程なくして、ベレットからの予告状が来ていた。

この街の警察署に送り届けられたらしい。

刑事の一人だった。

彼は顎の大部分を消失して、そして胸を大きく抉られていた。

どうやら、下顎の骨と、肋骨が奪い取られていたみたいだった。そして、顎の部分にタロットの死神のカードが挟まれて、ベルトからの犯行声明文がねじ込まれていた。

更に、怪盗であるだけでなく、彼の手によって、多くの女性達が強姦されて、全身を皮膚や筋肉を剥がされて、彼が『アート』と称する状態にされて晒されてきた事も多い。

完全なまでの猟奇殺人犯だ。

カナリーは、今夜、博物館に向かわなければならない。

動悸がする。眩暈もしてきた。

だが、此処で折れるわけにはいけない。

気晴らしをしようと思った。

彼女は、球体関節人形が好きだった。

人形に自分自身の心の空白や、痛みを投影する。その行為によって、少しだけ救われたような気がした。

カナリーは『白色の傷』へと向かう事を決める。

今、この街で展示会が開かれているのだ。

謎に満ちた人形作家コッペリアの生み出した、数々の人形、それらは『白色の傷シリーズ』と呼ばれていて、あちこちで展示会が開かれている。展示会の場も白色の傷と呼ばれる。彼の作品を見る事が、彼女にとっての癒やしだった。

きっと、とても感受性が強い人間なのだろう。

コッペリアの作品は痛みに満ち満ちている。粘土の中に自身の涙や血などを混ぜているとも言われる。彼は山奥の工房にて人を避けて生活しているとも、噂によれば、失踪したとも言われている。

カナリーはずっと孤独だった。彼女の孤独を和らげてくれるのは、彼の作品群だった。糸で縫い付けられ、包帯を巻かれ、顔をズタズタに刻まれた人形達は彼女の心を打った。コッペリアの作品は、虐待や性暴力や、あるいは戦争や病気をテーマにしたものが多かった。それでも何故か、彼自身の孤独をイメージしたオブジェのように思えた。カナリーの孤独と重なった。写真集も全て購入した。

こうして、人形達を見ていると、まるで自分自身の心の奥底を見透かされているかのようだった。

十

展示会場に辿り着く。

今回のテーマは『夜』をイメージしているみたいだった。

部屋全体が薄暗く、僅かばかりの照明によって、作品が照らし出されている。

「彼とはよく一緒に展示させて貰っているわ」

展示会の中で、カナリーは、ふいに声を掛けられている。

「私も此処で個展を開いた事はあるわ」



妙齡の女性だった。

赤と緑を基調にした、ビロードのドレスを纏っている。

「貴女は……？」

「私？ 私はオブジダン。彼とは同業者よ、ねえ、貴女、もしかして私の作品も知っているんじゃないの？」

十

オブシダンは、彼女のファン達からサインや握手を求められて、しばらくの間、カナリーは、外で夕焼けを見ながら彼女を待ち続ける事になった。

どうやら、コッペリアと同時に、展示出来たのは、彼女にとっての誇りみたいだった。

オブシダンはメビウスとは直接、面識が無いのだと言った。なので、メビウスと対面する事が出来たカナリーを、少し羨んでいるように思えた。

この妙齡の人形作家を見ていると、どうしても、所謂、自分と同じような『能力者』とは思えなかった。

これから、二人は、怪盗ベレットが狙おうとしている博物館に向かうのだ。……命の保証は無かった。ベレットは人を殺害する事も何とも思っていない。しかも、かなり残虐で、人とは思えない方法で殺すのだ。そんな相手と、いきなり対峙しなければならない。正直、カナリーは気が重かった。

狙っているのは『眼球』と呼ばれる、琥珀色をした、二つの丸い宝石だ。

この宝石は、本物の人間の手の骨を加工した入れ物に入っている。

オブシダンは、おそらくは、宝石そのものではなく、手の骨が目当てで、宝石を盗もうとしているのだろう、と言った。

十

警備員達は、すんなりとカナリーを夜の博物館の中へと入れてくれた。

オブシダンは外で待機するみたいだった。

「基本的には、絶対に持ち場を離れないようにね」

彼女はそれだけ告げた。

赤い煙が揺らめいていく。

オブシダンは香を焚いていた。

この香によって、周辺にいる者達の動向を読み取る事が出来るらしい。

そして、彼女は、自分は基本的に補助的な力なのだとだけ言った。

博物館には幾つもの奇妙なオブジェが並べられていたが、中でも、カナリーの気を引いたのは、巨大なサーベル・タイガーの剥製だった。

丁度、その剥製の隣に、ベレットが狙っている宝石は展示されていた。

この場所は地下一階だった。階段を一つ降りると、幻想の庭園をイメージして、様々な美術が配置されている。此処は全四階建ての建物で、うち一階はオペラのホール、三、四階はレストランやカフェテラスになっていた。二階は絵画を中心に飾られている。

夕方が終わり、真夜中へと近付いてきた頃だろうか。

それは、唐突に起こった。

遠くで、男達の叫び声が起こった。

どうやら、二階の通路の辺りだろう。

カナリーは、思わず、持ち場を離れて、その場所へと向かう。

運動が得意ではないので、走ると、すぐに動悸がした。

カナリーはふと、奇妙なものを見つける。

それは空中へと浮いていた。

人の形をしていた。

警備員達だった。

彼らは背中をへの字に、あるいは七の字のように頭をもたげて、あるいは九の字のように上半身を丸めて、様々な形で、みな空中に浮かんでいた。どうやら、みな死亡しているみたいだった。

一体、何が起こったのか分からない。

後ろから、別の警備員の一人がやってきた。背の高い男だった。彼は死体を見ながら検分していた。

「貴方はお名前は何と言いますか？」

警備員はカナリーに訊ねる。

「カナリー、と申します……」

この警備員は、何処か、尋常ではない気配を漂わせていた。

「あれ、見てください」

死んだ警備員達の身体の一部が、不自然に天井へ向かって尖っている。どうやら、そこが致命傷になっているみたいだった。いずれも喉や心臓などだ。

それらの部位には何かが突き刺さっていた。

それは、黒塗りの鉄製の刃物だった。ナイフというには短すぎて、剣というには長い。小刀とでも言うべきか。

どうやら、小刀の鞘の部分だけで、警備員達の死体を空中に支えているみたいだった。

奇妙な光景だった。

それ自体が、一つの前衛芸術のそれを思わせた。

「クソッ！ 一体、何が起きているんだっ？」

大柄の警備員は壁を叩く。

「貴方は……？」

彼は、帽子を直して、少し答えに詰まっているみたいだったが、すぐに口を開く。

「………………。カナリーさん。私はシンジゲートから派遣されてきた職員です。貴方達を支援

しなければならない。此処の警備員達もそうです。臨時とは言え、彼らは私の部下だった……、  
ああ……………」

大柄の男は、もう一度、壁を拳で叩く。

「これは何が起きているのですか？」

「異形の力です。行っているのは、人間を超えた者達の力です。あるいは元々、人でさえなかったのかもしれない」

二人は走る。

目当ての宝石が盗まれていないかを。

カナリーは元いた配置へと戻る。

オブシダンが宙に浮いていた。

どうやら、彼女は失神しているみたいだった。

まるで、重力を無視するかのように、彼女は少し大き目の絨毯に支えられて、空中高く浮かんでいた、いや……浮かんでいる、というよりも、停止している、といった方がいいかもしれない。絨毯の下に、まるで透明な人間一人を軽々と支えられるくらいのガラス板があるかのように。

オブシダンが向かってきた通路にも、血が点々と続いていた。どうやら、他の警備員達の死体だろう。

そして。

そこに、そいつは佇んでいた。全身を青と紫色のローブで纏っていた。顔を同じような色調のフードで纏っている。

「ベレットか……？」

カナリーの隣にいた、大柄の男は訊ねた。

「宝石は何処だ？」

フードの男は訊ねる。

この場所に展示されている宝石には眼もくれていない。

「何処だ、と聞いている」

大柄の警備員は、渋々、言う。

「よく、そこにあるのが偽物だと分かったな」

「俺の鑑識眼を舐めるな。それから触れたら爆破するように仕掛けてあるだろう？ それにほら、骨も偽物だ。レプリカだろう。舐めるなよ」

どうやら、やはり、この男は、宝石の方ではなく、宝石の装飾になっている人の骨の方を欲しているみたいだった。

フードの男は、懐から小刀(こがたな)を取り出す。

「上の女を取引に使おうか？」

大柄の警備員は顎を撫でながら、しばらく考えた後、告げた。

「構わない。彼女は人質にならない。我々の任務は宝石を守る事。彼女は名誉の殉死だ。とにかく、渡さない」

カナリーの顔が驚愕する。大柄の男は意見を変えるつもりは無いみたいだった。

「成る程.....」

ベレトは、くるん、くるん、と小刀を回す。

「いいだろう。お前を少し楽しませて聞き出す事にする。その方が効率が良さそうだからな。いか、覚えておけ、俺は宝探しは好きじゃない。俺は生粋の強盗だからな。恋文を綴って、それを届ける。一方的に相手を探し続けるのは好きじゃないんだ。すぐにでも、口説いてしまいたいんだよ」

怪盗の両眼は、少しだけ、怒りに震えているように見えた。

警備員は突然、機関銃を手にしていて。

何処にしまっていたのだろうか.....。

そして彼は、引き金を引いて、ベレトに撃ち込んでいく。

カナリーと、そして、警備員は一体、何が起きているのか分からなかった。

ベレトの周りに、まるで透明な盾でも存在するかのように、銃弾が空中に停止していた。

不思議な光景だった。

「ふふうう、この夜陰(やいん)の悪魔、ベレト様を舐めるな」

彼は粘性さえ帯びた声で告げる。

ベレトは銃弾の上を、まるで階段のように登っていく。

重力を完全に無視していた。

「まだ撃ち込んでみるか？ 無駄だと思うけどなあ」

小馬鹿にしたような笑い声が響く。

「カナリーさん、このゴードロックが奴を捕らえます！」

警備員は名を名乗ると、手すりをよじ登り、一階のホールへと飛び降りる。

そして、大きめのショット・ガンを、ベレトの間近に向けて放った。

怪盗は、左手を前に突き出したただけだった。

発砲音がした。

銃弾が空中で静止している。落下する事もなく、静止していた。

だが。

ゴードロックは、更に懐に隠し持っていた拳銃の引き金を引く。

すると、ベレトのフードが弾け飛んだ。

カナリーは寒気がした。

フードの下から顔を現したのは、とても美しい顔だった。

そう、それはまるで人形だった。

いや、人形そのものにも見える。長く美しい白に近い金髪をしていた。唇は林檎のように紅色で、瞳は深い海のようなブルーだ。

服装は、ウェディングドレスのような白い服の上に、黒いビスチェを身に付けていた。両腕は肩から素肌を露にして、手の近くには黒いアーム・ウォーマーを身に付けていた。

カナリーは思い出す、メビウスも人形だ。ただ、メビウスの無表情さに比べて、ベレトの方は、とても邪悪そうな表情をしていた。

「女だったのか？」

ゴードロックは、驚いたような顔をする。

「男だけど？」

「オカマか？」

「煩(うるせ)えな。似合うし、美しいと思うから、こんな格好をしている」

ベレトは笑う。そして、首筋を抑えた。

どうやら、先ほど、ゴードロックが発射した拳銃の弾が、彼の首をかすめたみたいだった。

「よくも俺の首をっ！」

ベレトは、警備員姿の男の左手を鷲掴みする。

ゴードロックは、何をされたのか、分からないみたいだった。

「……なんだ、腕がまるで動かない……いや」

ベレトは、ゴードロックの靴に蹴りを入れる。すると、どうやら、ゴードロックは両脚を動かさずにいるみたいだった。最後にベレトは彼の右肩に肘(ひじ)打ちをする。

ゴードロックは倒れる事も出来ずに、不自然な態勢で硬直していた。

「さて、死んで貰うぞ」

ベレトは刃物を取り出す。

突如。

博物館一階ホール中央の、サーベル・タイガーの像が動き、ベレトへと襲い掛かる。

それは、ベレトがゴードロックを殺害するのを防ぐには、十分な攻撃だった。

オブシダンだった。

彼女は香を辺りに向けて焚いていた。

淡い赤の香が周辺に漂っていく。

博物館に展示されている、鳥の剥製(はくせい)なども動き出していく。

そして。

まるで白い霧のように、ベレトの周辺が香の煙を横に退けていた。それはまるで白いアメーバのようにも見えた。

「それが、貴方の能力の射程距離なのね」

オブシダンは告げる。

「畜生がっ！」

ベレトは、歯軋(はぎし)りすると、屈辱に歪んだ顔で、跳躍して、二階へと向かった。

十

「我々は能力者と呼ばれる者達だ」

怪盗ベレトの対策本部が立てられる。

ゴードロックは、先ほどの警備員姿ではなく、軍服姿を纏っていた。

結局の処、美術館での自己紹介とは違い、ゴードロックは警備員の格好をして、派遣されてき

た警察の人間ではなく、彼らに混ざっていた『栄光の手』のメンバーみたいだった。

どうやら、この支部は、彼が指揮官を務めているらしい。

血気盛んな男だ。

しきりにホワイト・ボードを叩いていた。

「諸君も御存じの通り、我々はメビウス様からの指令によって動いている。指令伝達書は我々とは別の者達の手によって送られてくるっ！」

そこは、あるビルの地下に作られた部屋だった。

大型のパソコンが幾つか置かれ、他に地図や資料の束が本棚に納められている。余計なもの一切無い、殺伐とした部屋だった。

部屋の中にはカナリーを含めて、六名の人間がいた。

ゴードロックとオブシダンの他に、着物姿の女に、太ってスナック菓子ばかり食べている男、それから白い服の顔色の悪い猫背の男。

それぞれ、男三名、女三名といった処か。

「我々は法の上でも、殺し屋達の手によっても裁けない者達を裁く機関だっ！ 能力者組合である『ドーン』を創設されたメビウス様の腕であり、指を務める『ハンド・オブ・グローリー』のメンバーであるっ！」

軍服の男は、再び、ホワイト・ボードを叩いた。

「今回、あたし達が始末するべきターゲットである怪盗ベレットは、何故、特別抹殺対象にされたのかしら？」

部屋の隅で、キセルを吹かしていた女が訊ねた。

「花鬱(かうつ)、我々はメビウス様の命令通りに動けばいいのだ。疑問を挟むな」

「……………ゴード、あたしゃあ、以前、メビウス様の指令で大切な後輩を失ってねえ。あたしのミスとは言え、どうしても慎重になっているのさあ。メビウス様はあたし達を試しているように思うわ。何故、あの方御自身が全て動かないのかしら」

「花鬱、俺は軍人だ。今は前線から退いたとは言え、軍人たるもの上官の命令には絶対だと考えている。我々が口を挟むべき事では無いっ！」

「それは、タダの狂ったカルト宗教と変わらないわさあねえ」

二人は、少しだけ睨み合う。

オブシダンはそれを見て、不愉快な顔をする。

この二人は、性格が余り、合わないのかもしれない。

「メビウス様の意図は単純でしょ？ あの方は錬金術師フルカネリとその信者達を殲滅したいか、もしくは多次元世界を渡れる者を警戒している。後はフリーのハンター達では始末出来ない相手、直々に始末する事を考えている。それだけだと思うけれど？」

人形作家は、呆れたようにゴードロックの顔を眺めていた。

そして、ホワイト・ボードを見ながら、描かれた文字が消え掛けていて、眉を顰める。

「俺っちは、テラリスって言うんだがな」

酷く痩せた、陰鬱な顔色の男は言った。

「ベレトの居住地なら、突き止めたぜ。俺っちのチカラでな」

テラリスと名乗った男は、地図を広げた。

十

古びた塔の跡地だった。

一体、何の為に、いつの頃に作られたのかは分からない遺跡だ。

そんな場所を、ベレトはねぐらに使っているみたいなのだ。

切り込み隊長を買って出たのは、花鬱という女だった。

オブシダンは、相変わらず、建造物の周辺に香を焚いていた。

あくまで、彼女は補助に徹する立場だ。

ただ、オブシダンは、メンバーの中で、一番の重要な任務に付いているらしい。なので、無理はさせられないとの事だった。

「あんたも気を付けな。メビウス様の直属の部下である栄光の手のメンバーは、入れ替わりが激しいみたいだから」

花鬱はそうカナリーに告げる。

おそらく、この女性は、沢山の仲間達の死を見てきたのだろうな、と、カナリーは推測する。

栄光の手……、ハンド・オブ・グローリーのメンバーは、この六名だけでは無いと聞く。あくまでも、ベレトを抹殺するチームとして、このメンバーが選ばれたのだと聞かされている。そしてまた、花鬱が言うには、メビウスは部下を使い捨てにする傾向を感じると……。

十

「晚餐に来てくれるとは光栄だ」

魔人ベレトは嬉しそうに言った。

彼は薔薇の花弁(はなびら)をミルクと混ぜて調合した飲み物を口にしていた。部屋全体には、ミルラの香りが漂っている。

デス・ウィングは席に着くと、出された肉料理をまじまじと見た。

「何の肉だ？ 私は人の肉は好かない」

「牛肉だよ」

そう言うと、ベレトは肉料理にナイフを入れる。

「ちなみに、俺は中華も好きだ。今度、それも御馳走する」

ベレトは、肉にナイフを入れていく、血が滴っていた。

「それにしても、客人が来たみたいだぞ」

デス・ウィングは、少し面倒臭そうに告げた。

十

ゴードロックと、ミキシングが、塔の中へと乱入する。

すぐに、待ち伏せされていた事が分かった。

中には、牛や馬やヒヒの頭を持った人型の怪物達が、それぞれ、槍や棍棒を手にしていた。

ゴードロックが、彼らに機関銃を撃ち込んでいく。

ミキシングは、巨大な拳で、敵を殴り払っていた。

後方から、無数の刃物が飛んでいく。日本刀だった。次々と、怪物達の首が一刀両断にされ、はねられていく。

栄光の手のメンバー達は、それなりの実力者揃いみたいだった。

カナリーは後ろの方で、彼らの姿を眺めていた。

ガタン、と、松明の一つが倒れる。

炎が床を焼いていく。

それを見て、カナリーは蹲って震え始める。

「クソッ！ 何なんだ？ こいつら？ 銃弾が弾かれる！」

「固まっけては駄目さね。一度に襲撃されるわよ！」

「うおおお、俺が全員、爆破してやるよお！」

みな、それぞれに混乱の混ざった声で、叫んでいた。

やがて、みな、現れた怪物達との乱戦になっていく。

特に、ゴードロックの取り出す、拳銃の発射音が洞窟の中で大きく反響していく。それに続いて、爆弾でも爆発した音が連続して続いていく。

他のメンバーも散り散りになっていく。

カナリーは、へたり込んでいた。

彼女は、自分に力が無いという事を嫌でも思い知らされる事になった。

気付けば、仲間達と離れていた。

とてつもなく、心細くなる。

彼女はランタンを手にして、塔の中を進んでいく。

風の音が軋(きし)んでいる。

自分の黒髪が靡(なび)いていく。

何かが、自分を誘っているようだった。

まるで、心地よい音色のように、彼女はその場所へと向かっていく。



彼女は夜の闇と共にいる。

セルリアは、この辺りのバーで、一番の美女だった。

酔漢達は彼女の踊りに魅了される。

この街では、彼女がまず、魔人の犠牲者になった。

声を掛けられて、首の後ろに痛みを感じ、そのまま気絶してしまった。

気が付くと、手術室のような場所にいた。

十

セルリアは、身体を少しずつ刻まれていくのが分かった。まず、脚の肉を削がれていく。自らの肉が剥き出しになった。両腕は鎖によって天井から吊るされている。服は剥ぎ取られ、下着だけの姿にされていた。いずれ、この胸と下半身を覆う薄布も取られるだろう。

鋭いナイフが光った。

彼女は皮膚を剥がされていく。

剥き出しの筋組織が露になる。不思議と血は流れない。痛みだけはある。苦痛は発狂しそうになる。実際、彼女は狂い始めていた。

痛覚が止まっていく。

しばらくの間、彼女は失神していた。

数時間くらい経過した頃だろうか。

視界が明瞭になっていく。

姿鏡が飾られていた。

彼女は、自分の姿を垣間見る。

まるで、首から下は人体模型のような姿へと変わっていた。何故か、血が流れない。自分は生きているのだろうか？ 死人なのに意識がある状態なのだろうか？

そう言えば、痛覚を感じない。

痛覚を感じさせる何かを止められているような気がする。麻酔でも掛けられているのだろうか。けれども、どうにもならない恐怖だけはあった。

自分の身体は、もう元には戻らないのだと分かった。

脚の先から激痛が襲ってくる。やがて、それは脚の上へと這い上がっていく。

彼女は余りの激痛の余り、再び、気絶する。

彼女は心の底から祈る、自らの命が終わりを迎える事を。

十

ベレットは女達を強姦してから、殺害する。

性欲よりも、支配欲なのだろう。

まるで、当たり前なものとしてそうなのだ。そうする事によって、最初の傷を入れるのだ。自分の素材になったような気がするのだ。

解体する前も、解体中にも、性的な凌辱を行う。そして、彼女達のその苦痛がより強い刺激となって、創作意欲を喚起させるのだ。

作品は増え続ける、死体を、花や木や、貝殻や宝石、ありとあらゆるもので、肉付けしてやろう。情熱は、絶え間なく続いていく。

「お前は自分が何者なのか分からないって顔をしているな？」

それは影だけだった。

カナリーはランタンの明かりを落とさないように、慎重に前に進んでいく。

「他の者達に興味は無いが、お前には、興味が湧いた。お前のその力は一体、何なんだろうな？」

何かを抑圧しているように思えるがな」

まるで、彼女の心の底を覗き込むような声だった。

「貴方は、……何？」

「私は影のような存在だよ。少しだけ違うかもしれないがな」

その人物は、くくっ、と笑う。

「これから先にいる者は、生贄の儀式に取り憑かれた者だよ。お前はきっと、何か強いトラウマがある、って顔をしている。お前は自らのトラウマを乗り越える為に此処に来たのか？」

なら、お前の運命に興味があるんだよ」

カナリーは息を飲む。

ランタンを間違っって落とさないように、強く握り締める。

暗闇になってしまうと、この影に心を全て飲み込まれるような気がした。

「処でこんな話をしたいと思うんだ。ある街の文化の話だ」

影は、取りとめもなく話し始める。

「ある街の文化の事だよ。そこは電化製品の技術はそれなりに発展していて、パソコンも小型電話機も普及しているし、TVに、アニメも流せるんだ。ビルも並んでいる。でも、原始的な文化が伝統行事として、残っているんだよ」

流暢に奇妙な話を紡いでいく。

「ある街の事だが、そこでは、伝統的な行事として、供犠が残っているんだ。生贄の儀式だな。年端もいかない少女を使って、少女を十字架に磔にする。台座の上に鎖で繋ぐ場合もある。そして、国民の見ている前で、その少女は生きながらにして、ワニや蛇や、大トカゲによって貪り喰われていくんだ。巨大昆虫や食虫植物の場合もあるな。それは、その街の宗教だからだ。少女は半裸だったり、裸体を晒していたりするらしい。その行事は年に数回は行われて、その映像は配信され、写真や絵ハガキ、アニメ絵による戯画などにされて、商品として売られるそうさ」

影は、語り続ける。

「つまり、この伝統は街おこしの為の『商品の形』なんだな。残酷な生贄が見世物として、伝統行事になっているんだ」

カナリーの頬から、汗が流れ落ちる。

「儀式には生娘が使われるそうだが。儀式用に選別された少女が生娘では無いと判断された場合、別の儀式に使われるそうさ」

彼女は何を話しているのだろう、カナリーの理解を超え始めていた。

「その別の儀式だが、公の場では公開されないが。最低、七日間。長くて、一ヶ月以上に渡って

、身体に食虫植物の種や、食人虫の卵を植え付けられて、少しずつ、長い間、苦しみ続けて死ぬ事になるそうだ。しかもその光景も、映像に映されて、フィルムやアニメ化されて売られるそうだ。何でも、どちらの儀式も、犠牲になる少女の顔、容姿を模して、ペンダントやコーヒー・カップの柄、ポスターなど、あらゆる商品として出回るそうだ。そのイベントが行われる前は、しきりに街中に生贄の娘の顔写真が印刷された宣伝ポスターが出回るそうなんだ」  
一体、彼女は何を話しているのだろうか？  
きっと、悪趣味な冗談なのだろう。カナリーはそう判断する事にした。

十

ミキシングは愚図だとよく人から言われた。  
もしくは、呆け者、馬鹿者、昼行灯、呼ばれ方は様々だ。  
だから、必死で道化を演じた。  
場を和ませる役回りをしていた。  
屈辱を隠す為に、笑った。  
けれども、そんな事をすればする程、余計に周りから嘲笑される。彼は耐えられなかった。  
そんな人生を送る中、ドーンの中枢の噂を聞いて、彼は生涯を掛けてでも、そのものに近付こうと思った。そう、中枢にいる人物が、自らの下で働いてくれる者を募っている事をだ……。中枢の下で働く事におけるのメリットは少ない。普通の賞金稼ぎをやっていた方がよほど儲かる。ドーンの基本の仕事である、色々な人間や国から賞金をかけられた賞金首(ランキング)を始末する仕事の方が、稼ぎは多い。だから、普通は稼ぎが多く、リスクも少ない方をやる。  
だが、そんなものよりも大切なものが、彼には欲しかった。それは自尊心だった。  
中枢からの特別任務を行う度に、これまで自分を見下してきた奴らを逆に、見下せる。  
マトモに給料は支払われないかもしれない。  
あるのは、名誉だけだとも聞く。  
充分だった。  
これまで、自分を馬鹿にしてきた奴らを見返してやりたい。それが、彼にとってのシンプルな人生の意味だった。  
そして、彼の方から、メビウスに近付いた。  
たとえ、足手まといになっても構わない。とにかく強大な地位にいる者の傍にいる事、それが彼にとっての精神の支えになった。今まで自分を馬鹿にした奴らを見下せる。  
霧のような人生に、道が開けるのだ。  
……そうか。それ程、私に付いていきたいのか。  
彼は必至で懇願した。  
……まあ、構わない。これからはお前は私直属の部下になり、特別任務に付いて貰おうか。ランキングに標記されていない者達を始末する事になるだろう。  
そして、普通のハンター達よりも、シビアな仕事が多いのだろう。だからこそ、やるだけの意

味はあった。

そんな仕事を、メビウスは了承してくれた。

光明が差し込んできたような気がした。

特別任務は大変だったが、仲間達は温かかった。もしかすると、彼らもはぐれ者達ばかりだったのかもしれない。

給料の方は、それなりに支払われた。

メビウスの手ではなく、初老の男から手渡された。彼は土地を使って、資金を集めているのだと言う。そして、メビウスに強く忠誠を誓っているのだと言う。初めて、給料の入った封筒を手渡された時、彼は人生の勝者になれたのだと実感した。

十

人の肉を切った包丁や、ナイフ、小刀が壁に立て掛けられている。

血塗れの、白いドレスと纏った長い金髪の男が、物音に気付いて振り返ったみたいだった。

まさか自分が、最初に、ベレトの下に辿り着くとは思わなかった。

ゴードロックか、花鬱か、どちらかだろうと思った。

ミキシングは、鼻息を荒げる。

「ムシケラが。よく来たな」

ベレトは、本当に小さな甲虫か、ミミズでも見るような眼で、ミキシングを見ていた。

「他にも侵入者がいるみたいだな」

ベレトは、腕に付いた血を、布で拭いていく。

そして、肉切り包丁を握り締め直す。

「お前から解剖してやろうか？ お前に恋の詩を並べたくはないがな」

ベレトは冷酷な瞳で告げる。

大柄の太った男は、自分を奮い立たせる。

ミキシングは、両の拳を突き出す。

触れたものを、爆破する拳だ。それは多重にも重なり、爆発していく。それは一つの音楽だった。彼はこれで、ベレトを倒すつもりだった。

しかし……、この部屋の中で、奇妙な事が起こっていた。

空中に。

ナイフが制止していた。

まるで、見えないガラスの上に浮いているかのように静止していた。

気付くと。

周り全てが、ナイフや、斧、刀剣などによって囲まれていた。それら全ては宙に浮かんでいた

。

「俺の能力はまだ完成していない。力は発展の途中だ。だからな、色々と実験がしたいんだよ、お前に俺の愛の情熱を注ぐ事に決めたんだ。ラブ・ソングだよ、受け取ってくれ」

ベレトは、ミキシングに向かって、手斧を放り投げる。それは、空中で、突然、止まった。

「ちなみに能力を解除すると、一斉にお前に向かうぞ。やってみるな？」

「やってみろよおっ！」

ミキシングは、全身から湯気を出していた。

そして、自らの周囲を爆発させていく。

次々と、刃物が彼に向かっていくが、全て爆発の衝撃によって弾き飛ばしていく。

ベレトに向かって、全力の拳の爆撃を振るう。

だが.....。

ベレトは無傷だった。服に傷一つさえ付いていない。

それ処か、埃一つさえ付いていないように見えた。

そもそも、彼の拳は、空中で停止している。

「『固定』しているからな。俺の周囲全てをな」

ミキシングは、パニックになっていく。

攻撃が届かない。

何が起きているのか、太った大男には理解出来ないみたいだった。

ミキシングは、狼狽する。仲間達を呼ぶべきだろう。だが.....。

「花鬱やゴードロックも俺と同じ、単純に切ったり撃ったりするだけの力だ。なら、俺一人で充分だよなあ。俺達のメンツは、単純な攻撃の能力者が多いからなあ」

彼は独り言をブツブツと呟き始める。

ベレトはそれを聞き逃さなかった。

「ほう、そうなのか」

ミキシングはだんだん感情を激しく現していく。

「ああ、花鬱の奴は、沢山、刀を出すだけだ。ゴードロックは、銃器を小さくしてポケットに仕舞っているだけだ。あいつら、俺とおんなじような力しかない癖に、大した事無い癖に、この俺に命令しやがって.....」

「仲間達なんだな。どんな連中だ？」

「着物のイケスカネエ女が花鬱で、未練たらしく軍服着ている奴がゴードロックだよお！ ゴードの奴は、お前の事を手ごわいって言ってやがったぜえ。ああ、クソだよなあ。俺がてめえなんぞ、軽く倒してやるよお」

「お前の仲間はお前に優しくないんだな、他に仲良い奴はいるのか？ お前に優しくしてくれるのか？」

「カナリーはなんだか分からねえ新入りだ。オブシダンも獣を使って外を見張って楽だよなあっ！ ああ、俺達突撃部隊より楽そうでもいいんだよお！」

「後、一人いるな？ この塔を見つけてきた奴が」

「テラリスは陰気だけどよお。あいつは特別、俺に優しくしてくれんだよお。奴は白いハト使って、色々な場所を探索してるんだよ。力の痕跡がハトを通じて見つけられるんだとよ。あいつ、色々な場所を見つけれられるんだよお。隠したリンゴだって見つけられる」

そしは、ふと、少し冷静になったみたいだった。

「ああ、待て待て、今、仲間の事、散々言ったけどよお。花鬱とゴードの事、なんだかんだで、あいつら優しいよ。俺に以前、つるんでいた奴らよりも、よっぽど、俺を尊重してくれるよお。だからさ、会ったら、俺がこんな事言っていたって言わないでくれよ、疲れて、愚痴っちまったんだよお！」

太った大男は、両手をばたばたと動かしていた。

「ありがとう。尋問も拷問も無しで、お前自ら仲間の能力をペラペラと喋ってくれてな。随分と愚図なんだな、お前」

それを聞いて、ミキシングは、我に返った。

そして、顔を羞恥と怒りで満たしながら、ベレトへと向かっていった。

ベレトは、近くにあった縄に触れる。

一瞬の出来事だった。

突然、大量の岩が、ミキシングに向かって降り注いでいく。コンクリートのブロックも混ざっていた。

避ける事も出来ずに、大男は全身にトラップの攻撃を受けていく。

「俺のやっている、命を”固定”する為の研究に付き合ってくれ」

ベレトは、気を失っている大男の臉を開き、眼球の運動を確かめていた。

十

花鬱とゴードロックの二人は、巨大な昆虫との戦いに苦しんでいた。

大きなカマキリだった。

飛び跳ねながら、距離を置いて、二人を襲撃する。

鉤爪の付いた脚と、獰猛な顎、それらが巨大な洞窟の中で犇めいていた。

更に、鎧を纏った獣の頭の怪物達も襲ってくる。

一体一体は大した事が無くても、連戦でかなりの苦戦を強いられていた。

「畜生がっ！ このままでは弾切れ必須。花鬱、引くかっ！」

「仕方ないわねえ。このままじゃ、あたし達、ジリ貧だからねえ」

十

ミキシングは、……哀れな大男は、寝台の上に縛り付けられていた。

両手両足が動かせない。

鎖で繋がれているのだ。

ベレトは美しい顔で、彼を眺めていた。

「今からお前を飾りにしようと思うんだ」

大男は、口を塞がれていた。罵声も悲鳴も上げられない。仲間達への助けも求められない。

そこは、手術室のように、様々な器具が置かれていた。ただ、……麻酔は無さそうだった。

ベレトは壁に掛けられていたナイフを取り出す。

動物の骨で作られているものだろう。

それを、大男の眼球へと近付けてくる。

ベレトの両眼は嬉々としていた。

「お前はムダな肉が多いな。削いでスリムにしてやろう」

ナイフは、深く潜り込んでいく。

十

影は何処かに導いてくれているみたいだった。

洞窟の奥へ、奥へと向かっていく。

途中、階段を下る事になる。少しだけ長い階段だった。

地底湖が見えた。

潮の匂いがする。きっと、この湖は海へと繋がっているのだろう。

この人物には、きっと何かの思惑があるのだろう。だが、カナリーはよく分からなかった。

カナリーは既視感に襲われる。

少女趣味の部屋。絵本や、ヌイグルミが散りばめられた部屋だ。かつての自分の部屋。その場所を思い出す。もう全て焼けてしまった場所。失われた世界。

その色彩が、映像が、現実では無い事に気付く。

まったく違う場所に、今、佇んでいた。

少女趣味の部屋では無い。

そこは、骨董品の置かれた部屋のようなようだった。

彼女は、揺り籠のような椅子に座って本を読んでいた。

「お前はどうかや特別な存在みたいだな」

彼女は言う。青く、くすんだニットの服に、色褪せた元は黄色であったのであろうマフラーを首に巻いている。灰色の汚いズボンに、茶のブーツを穿いていた。

ギィ、ギィと、彼女は椅子を揺らしていた。

「その木の籠の事を教えてくれないか？ 鳥籠みたいだが、何を入れていたんだ？」

彼女の瞳は、カナリーの瞳を見つめ、心の底の深淵を覗き込んでくるかのようだった。

とてつもない怖気が、カナリーを襲った。この女は邪悪と呪詛、そのものを体現している存在ではないのだろうか。そうとしか思えなかった。

そう言えば、メビウスと会った時も、こんな感覚だったような気がする。色々な人間に出会ってきて、人に興味はあるのだけど、決定的に人間を理解出来ないといったような顔だ。

「この場所はベレトの趣味なんだそうだ。奴も可愛らしい一面も持っている。そう思わないか？ ととても良い趣味をしている」

本棚には魔術書のようなものが並んでいた。別の棚には宝石で柄を加工したナイフが飾られて



いた。天井からは牛の骨が吊り下げられている。床には虎か何かの毛皮が敷かれている。

窓があり、そこから光が漏れ出している。窓の外は蒼だ。海が広がっているのだ。海鳥が空を羽ばたいていた。

部屋は絶妙な具合に、闇に包まれていた。

青と黒のコントラストだ。

「お前の名を聞かせてくれないか？」

「カナリーです……。貴方は……？」

「デス・ウィング。もっとも、他の色々な名前や偽名を使う時もあるがな」

彼女はゆったりと、椅子にもたれながら、本をめくっていた。

「音楽があれば良かったんだが、何しろ、彼は音楽を聴かないらしい。好事家としては駄目だな。レコードでも置いてあれば、より良いんだが」

「貴方は……、ベレットと……」

「そうだな、友人だよ」

カナリーは息を飲む。

自分達は、ベレットを倒しに此処に来たのだ。

「私はお前だけには、興味があった。他の面子はどうでも良かったんだけどな」

デス・ウィングと名乗った女は、本を閉じる。

そして、棚の中に本を戻す。

何かを考え込んでいるみたいだった。

「カナリー、初めて会う者同士の話題では無いかもしれないが、人間は何故、生きているのだろうと感じた事は無いか？ 私はお前の物語を知りたいんだ。どのように生き、どのような価値を信じて、何を夢見ているのかをな」

彼女はカナリーの瞳を覗き込んでくる。

メビウスの面接を思い出す。少し前の事だ。あれから何日も経っていない。けれども、とても長い時間が経過しているように思えた。

メビウスは光を感じた。というよりも、今、思い出すと、善なるものに触れているような感覚だった。

けれども、目の前にいる相手から、ひらすらに湧き上がってくるのは、禍々しい悪なるものだ。それを巧く言葉に出来なくて、カナリーはもどかしい気持ちになる。ただ、とても息苦しかった。

「私に興味があるのですか……。私なんて何も……」

「それは違うだろう？ お前は何かを封じているみたいだがな」

ぞわりっ、と、悪寒がする。

デス・ウィングは、気付けば、カナリーの背後に立っていた。

一瞬の事だった。

「着いてこないか？ この先にある通路から、浜辺へと通じている場所があるんだ」

何か、自分の心の黒へと、その場所は繋がっているかのようだ。

潮の匂いが強くなっていく。

途中、炎が揺れる燭台があった。カナリーは震える。

「火が怖いのか？」

カナリーは頷く。

安らかな声だった。まるで、過去の記憶を全て吐露してしまいたいような気分だ。

「理由があるなら、話してみないか？」

彼女はとても、楽しげだった。

「幼い頃、家を焼かれたんです。怪物に。私の父と母は、焼き殺されました。私も両脚に大きな火傷を負いました……、それ以来……」

思い出したくない……、眼の前の存在は、カナリーの心の傷を、容赦なく覗き込もうとしているみたいだ。

「その木の鳥籠はなんなのかな？」

「形見みたいなものなんです」

「成る程」

風が吹き抜ける。カナリーは瞼を閉じる。

また、一瞬の出来事だった。

デス・ウィングが、カナリーの鳥籠を奪っていた。

「少し見させてくれ。どんな素材なんだろうな？ 何の木だ？ 何が詰まっている？」

強い好奇心が、その瞳には灯っていた。

「やめて……」

カナリーは、取り返そうと、迫る。

「冗談だよ」

デス・ウィングは、悪戯っぽく笑う。そして、鳥籠を返してくれた。

「訊ねるが、お前は復讐したいか？」

「何にでしょうか……」

「お前の両親を殺した奴らにだよ」

カナリーは胸が高鳴る。

「大きな……、カメレオンの怪物でした。炎を吐くんです。それ以来、私はトカゲや、炎が怖いんです。特に炎は駄目です。……」

復讐は……、考えた事は無かった。成人した時に再び来る。あの言葉がとても怖かった。

「お前は復讐心よりも、恐怖心が勝っている、って顔だな。違うか？ まあいい。それよりも、お前も力を持つ者なのだろう？ 一つ、私に見せて貰えないか？」

デス・ウィングは、燭台を手にする。

炎が揺らめいている。

カナリーは、動悸が激しくなる。

「見せないとお前の鳥籠を壊すぞ？」

周辺を、風が吹き荒れていく。

それは、少しずつ、暴風へと変わっていく。やがて、カナリーの周辺で、小さな風の渦が生まれていく。

彼女は、オイルを地面に垂らしていく。何処かに隠し持っていたのだろう。彼女は燭台を落とす。暗い洞窟の中に、炎が広がっていく。

「止めて、止めて、やめっ……っ！」

風が吹き荒れる。

炎はいつの間にか、カナリーを囲んでいた。

カナリーは、鳥籠を握り締める。

すると……………。

一帯が、竜巻によって、覆われていく。

炎が吹き飛ばされていく。

そして、……籠の中から、ねじれた奇怪な腕達が現れていた。次に起こったのは、籠の中から、魚達が現れて、空中を浮遊しながら、洞窟の壁を喰い破り始める。

炎は消えていた。

カナリーは地面にへたり込む。

「あ、あ、一体……………っ。……………」

「成る程。最初の竜巻、あれは私の力だな。次は何だ？ その籠には一体、何が封じられている？」

魚達は洞窟の壁を喰い続けていた。

「あれは、あれは、私が十六の頃に出会った、怖い殺し屋の力……っ！ 何？ 何が起きているの？ 分からない……………」

「成る程」

デス・ウィングは、とても楽しそうな顔をしていた。

「その籠は興味深いな。お前のトラウマを具現化しているのか、それとも、お前が受けた力を封じ込めているのか」

物欲しそうな声で、デス・ウィングは、鳥籠を見つめていた。

「いずれにしても、お前を此処に使わせた奴が、お前に価値を見出すのは分かったような気がする」

きっと、こいつは、メビウスの事を知っているのではないか……。

そのような気がした。

十

巨大な鉄のような甲殻を持つ、カマキリの化け物の首を落とす。しばらく動いて、二つの鎌を振るっていたが、それに銃弾を撃ち込んでいく。昆虫の怪物は腹を見せる、更に、そこに銃弾が撃ち込まれていく。……。

「どうにか、倒せたな」

ゴードロックと花鬱の二人は、互いの健闘をたたえ合う。

怪物達をようやく、退ける事が出来た。

塔の中は迷宮になっていて、複雑な構造をしていた。

洞窟のような場所もあれば、城塞の内部のような場所もあった。地底湖も通り抜けた。カナリ一と、ミキシングとは離れ離れになってしまった。

「さて、どうする？ 花鬱よお」

「そうねえ。このまま進んでもジリ貧だわねえ」

ゴードロックは少しだけ焦っていた。

弾切れが近付いている。後に残っている武器は、銃剣だけだ。それで直接、敵を突き殺すしかない。

二人はそれなりに戦闘経験を積んでいた。

なので、持久戦にも慣れていた。

だが、先程のような、大きな怪物がまだ何体も残っていれば、それを倒すだけの余力は、もう無いかもしれない。

「一度、撤退するか？」

「仲間達を残してきたからねえ。拾っていかないと」

これまで通ってきた道は覚えている。

「すまん。俺の『リトル・プリンス』は拳銃や機関銃、弾丸を縮小して、ポケットの中に大量に納めていく能力だ、お前の無限に刀が出てくる『邪魅曼荼羅』とは違う……」

「いえ、あたしも……、体力の消耗が、そのまま集中力の消耗に近付いているわ……。身体の方が疲弊してしまえば、刀を上手く操れない……」

どうやら、地上六階まである部屋はフェイクで、地下深くに道がある。そう二人は判断した。地下奥深くを、敵は住み家にしている。

「なあ、花鬱、こんな場所を見つけたんだが」

大柄の男は、地面を蹴る。

それは、地面に付けられた扉だった。ゴードロックはそれを銃剣で突く。すると、中から地下階段へと続く通路が見つかった。

「此处、行ってみるか？」

花鬱は、浮遊している刀を、通路の奥へと進めていく。

ゴードロックも、いつでも、戦闘態勢になれるように務めていた。

階段の途中には、通路には、何も無かった。

地下三階分、下った頃だろうか。階段は終わった。

それは、少し大き目の部屋だった。

二人は息を飲む。

見せ付ける為だったのだろうか。

鎖によって、その物体は天井から吊るされていた。

胴に鎖が幾重にも巻き付き、口の部分からは、二つのフックが二本の牙のように伸びていた。

眼球をえぐられ、頬の肉を削がれて、唇を切り取られ、両手両足の肉という肉を切り離されて、腹を裂かれて、胸肉を剥がされ、極限まで全身の肉や臓器を剥離されて、なお、彼は生きていた。

ちろちろと、赤い舌が揺れている。

剥き出しの心臓が鳴っていた。

痛々しいくらいに、健康的な色をしていた。

「ミキシング……か、……………」

体格を考えると、そうだろう。

陰惨な血溜まりと、肉塊になっている。

二人と分断され、短時間のうちに、彼は変わり果てた姿に変えられていたのだ。

「おい、どうする……、まだ生きているぞ……………」

「助けられないわね。苦しみを長引かせるだけね」

着物の女は、すぐに判断を下した。

花鬱は、刀剣を浮遊させて、ミキシングの首を一刀両断に断ち切る。続いて、身体を支えている鎖も切断していく。彼の巨体は地面にごろり、と、落ちる。

ぶらり、ぶらり、と、骸骨の顔となった男は、首と銅が離れても、未だ生きているみたいだった。口から伸びた鳥類の爪のような二つのフックが、ゆらりゆらりと揺れている。後頭部に孔を開けられて、フックを通されているのだ。

「何故、……死なないんだ……？」

ゴードロックは、歯をかちかちと鳴らす。花鬱も心なしか震えていた。

部屋の奥から、人影が近付いてくる。

「ようやく、他の客人も、俺の下に辿り着いたか。待ち疲れていたぞ」

透き通るような長い金髪に、ウェディングドレスのようなデザインの、真っ白なドレスを靡かせて、魔人ベレットが姿を現す。彼の右手には、刃の長い血塗りの肉切り包丁が握られていた。

「今日は絶頂な気分だ。加工するのは、一時間と掛からなかった。それにしても、随分と、俺の家で、迷ったみたいだな」

彼は皮肉めいた口調で言う。

「この男を処理するのに、たっぴりと、服を着替え、入浴する時間まで戴いた。お前達が悪いんだぞ？ 彼を一人にしたからな」

彼は挑発するような物言いだった。

花鬱はキセルを口にくわえて、紫煙を吐く。

「それで、あたし達を挑発しているのかしらね？ ねえ、何故、彼は首だけになっても、まだ生きられるのかしらね？」

ベレットは、不敵に笑う。

「俺の『マスター・ウィザード』は、命を固定する力へと変わりつつある。彼は死なない、不死なる存在へと固定されているのだからな」

「どうすれば、彼は死ぬのかしら？」

花鬱は、彼を憎しみの籠もる瞳で睨み付けていた。

ベレトは、天井から二つのフックによって吊り下げられた頭に向けて、肉切り包丁を伸ばす。包丁の刃先が触れる。すると、その物体は舌を動かすのを止めた。

「俺が命令するんだ。俺が死ぬと命ずれば、そいつは死ぬ。俺が固定を止めなければ、そいつは不死なる者となる。俺の意のままなんだ」

突然、彼は鼻歌を歌い出した。口ずさんでいるのは、グリーンスリーブスだ。ものかなしげな音色を、少し音を外しながら奏でている。部屋の中に不協和音は広がっていく。

ゴードロックは、後ずさりを始めた。彼は怯え始める。

対して、花鬱は、強くベレトを睨んでいた。

「あんたがやりたい事は分かるわ。どうせ、沢山、創りたいんでしょう？」

「そうだ。俺は執行者にして、祭儀の神官なんだ」

「『邪魅曼荼羅』。それがあたしの力の名前、覚えておけ」

花鬱の背後から、何本もの刀が出現する。

ベレトは哄笑していた。

数秒後。

二人は、互いに刃を交わしていた。

花鬱の頬が切り裂かれる。彼女が飛ばした鮮血が、空中で静止していた。

ベレトの周辺に、まるでゴム状の膜でもあるかのように、無数の刀が弾き飛ばされていく。

彼は、肉切り包丁を、まるで指揮棒のように振るっていた。

「お前も永遠の命にしてやるよっ！」

ベレトの刃が、花鬱の胸元へと向かっていった。

瞬間。

ベレトの手にした包丁が、弾け飛んでいく。

そして。

彼の全身は、機関銃の掃射を受ける事になった。

「この俺を忘れるんじゃないっ！」

ゴードロックは、機関銃を手にして叫んでいた。

ベレトは、大気を固定してクッションを創り出す事が出来るみたいだった。だが、それには耐久力が存在するみたいだった。彼は衝撃で壁に打ち付けられる。

「やったか？」

「いえ……………」

花鬱は頬の血を拭う。

こいつは、自分達を舐め過ぎだ。……そして、人間が時として発揮される怒りによる、能力の上昇を。

ベレトは立ち上がる。

「痛え……………。てめえら、よくも……………」

魔人は、口から血を吐き出す。

「防御したつもりだったのに……、多分、肋骨が折れてやがる……」

彼は、明らかに、想定外といった顔をしていた。

「二対一だ。観念しな」

ゴードロックは、今度は、ショットガンを取り出す。

魔人は一瞬のうちに判断する。

彼は背を向けて、二人から逃走し、部屋の奥へと向かっていく。

花鬱とゴードロックの二人は、それぞれ、刃と銃弾によって、追撃を入れていく。

十

「デス・ウィング、いるかっ!？」

ベレットは、必死の形相になりながら、自室を見渡す。

「途中、いくつか罫を仕掛けて、扉を嚴重に閉めた。だから、時間は稼げる。なあ、もっと、この俺にアドバイスをくれっ! 俺はどうすれば、もっと力を使える? どうすれば、もっと自らの力を引き出せる?」

彼はワインの瓶とゴブレットを掴むと、壁に叩き付けた。

「畜生……。何処に行きやがった?」

脚を大きく負傷した。胸や肩、両腕も酷く痛い。

「まさか、この俺が追い詰められているのか? 奴らに?」

彼は口元を押さえる。口の中が、ごろごろとしていた。

それは、歯だった。

歯が折れている。

前歯の隣だ。

姿鏡があった。自らの美しい姿は酷く憔悴していた。ドレスもボロボロだ。

彼は歯を口の中へと押し戻し、固定する。

そして、怒りの余り、姿鏡を殴り付けて叩き割る。

「この俺は、この世界を支配する魔術師になるんだ。こんな処で……」

「私は『商品』にならないものを売っている、と言っていいのかもしれないな」

デス・ウィングは、酷薄な微笑を浮かべ、嘲笑的に言う。

店に入ってきた人物は、彼女の友人だった。

「商品は人間の欲望によって動いていく。私はそんな人間の欲望がどんな風に動いていくのかが興味があるが。ただ、私の商品は大抵の場合、『消費』する事が出来ないんだ」

その人物は、彼女の言葉を興味深そうに聞いていた。

「消費出来ない商品ってのは何か？ それは不幸を与える事なんじゃないかって私は考えているんだ。欲望の充足だけでは終わらないもの。その時、その時に人間ってのは、自らの欲望を満たす為の商品を探すんだけど、それは芸術品の形を取っている場合も多いんだ」

デス・ウィングは、沢山の毒薬や拷問道具などを取り出して、ビロードの布が敷かれた台の上に並べる。

「処でアートってのは資本を回す為の商品の形なのだけど、アーティストってのは、そういう視点を嫌う者は多いと思うんだ。そして私は思うんだ。究極的な反資本主義的な、反商業主義的なアートってのは、殺人とかテロとかなんじゃないかってな」

彼女は、布の上に並べた道具の中から、一本のナイフを取り出して、そのナイフに刻まれた刃こぼれを愛おしそうに指で触れていた。

「もしくは、強姦とか、災害によるPTSDだとか。そういったものは残り続ける呪いになるんじゃないかってな。もし、消費されないアートがあるのだとすれば、それは人間の心を破壊するものでなければならないと思うんだ。商品の概念が発明されてから、そもそも、人間の命自体が国家や資本を回していく為のリソースだと言われてきたけれども、そもそも、人間存在自体が商品でしかないのなら、人間の作り出すものなんて、全てが商品でしかないよな？」

彼女の言葉は、ますます熱を帯びていった。

「なあ、高度な資本主義社会、消費社会において、金によって交換不可能な商品で無いアートなんてあるのかな？ 作品の聖性だとか、美のアイデアだとか、文化の意味だとか、心の滋養だとか、色々言われているけれど、金と交換不可能なアートなんてあるのかな？」

デス・ウィングは、空ろな瞳で、韜晦(とうかい)を込めるように話を続けていく。

「私は人間の命や文明や、国家の領土や、あらゆる生命も、民族も、人権概念も、そんなものは金で買える商品であり、資源であり、市場であり、消費可能なものであり、交換可能なものであり、着せ替え可能で、改竄可能で、複製可能で、使い捨て可能で、ゴミのように扱う事が可能で、廃棄可能で、略奪可能で、凌辱可能で、無価値なものだと認定可能なものだと見ているのだけど、金や貨幣以上に価値のあるものなんてあるのかな？」

彼女の友人は、彼女の疑問に対して、返答に詰まる。

正直、理解しきれない言葉の数々だった。

「まあ、これは経済の視点の話だよ。別に私の本意じゃない。前に核兵器をあらゆる国に売って



、「一大ビジネスにしている男と経済的取引をした時に、その男の理屈を話してみただけなんだ」  
そして、彼女は爆弾の設計図などを取り出して、目の前の人物に見せた。

「商品に良い悪いなどの善悪は無いな。ただ、それは人間に階級を作り、支配者と被支配者を作り、命をより低い価値に、あるいは他の思想や美学や信仰をより低い価値のものへと変化させていくという側面がある、ってだけだよ」

「どうやら、戦闘機や戦車の設計図も所有しているみたいだった。死の商人から、もう旧型のものなのでいらぬ、と、タダ同然で貰ったものらしい。

「私は彼とは違った意味で、死をビジネスにしているんだ。だからこそ思うんだ、私の意志は、この世界を覆う金と資本が巡っていく構造よりも、強いかってな」

「どうやら、核や原子力プラントの設計図も混ざっているみたいだった。緻密に描かれたそれは、市場流通している図鑑の絵ではなく、国によっては、喉から手が出る程、欲しがりそうなものに見えた。

「ふっ、貨幣は信仰みたいなんだ。人間が発明した狂信なんだ。でも、それはとても根強くて、根源的な意味で否定する事が難しいんだ。私が愛して止まない、死や無が絶対的なものであるようにな」

そして、ふと、デス・ウィングは、目の前にいる人物が、この店に来たであろう目的を思い出したみたいだった。

「処で何か買っていかないか？ 私の『商品』を……。消費させない自信はあるんだけどな……………」

店に来た人物の方も、此処に来た用事を思い出し、店の中を物色する事に決めた。

きっと、これが彼女なりのビジネス・トークなのだろう……。

## # 003 水色の墓標

---

軍隊生活は長かったが、挫折した。

そのコンプレックスが、ゴードロックという男を突き動かしていた。

上官の命令に従って、突撃隊に参加した。

仲間を守り、戦争で沢山の敵兵を殺した。

しかし、途中で、戦争が終わり、自分が軍人であるという事の行き場が無くなってしまった。その戦争は敗戦に近いものだった。

グダグダな人生を送っていた時だった、メビウスに出会って、彼女の勅命(ちよくめい)の下に、特別任務を行う栄光の手(ハンド・オブ・グローリー)という存在を教えられたのは。

ハンド・オブ・グローリーのメンバーは、それぞれ、何かしらの人生の挫折や喪失を持っているに違いない、彼は漠然とそんな確信をしていた。他のメンバーと、深く話し込んだ事は無いが。

かつて、軍人をやっていた時よりも充実している。

今や忠誠を尽くすべき相手はメビウス・リングなのだが、あの球体関節人形は、決して規律立った命令を行わない。彼は規律が欲しかった、軍隊における美しい全体主義の中にずっと溶け込んでいたかった。規律を失ってからの彼は、放蕩に耽っていた。ギャンブルや女漁り、酒浸りになった。

泥沼の生活から引き出してくれたのが、メビウスだった。

彼女の為になら、死ねると思う。

.....お前の可能性に、価値を感じる。

そう告げられた時、ゴードロックは無情の喜びを感じていた。

十

「まさか、俺が逃げる事になるとはな」

ベレットは、よろめきながら、階段を下りていく。

敵二人に追いつかれるのは、時間の問題だろう。

敵の戦力を見誤った。自分の慢心が招いたのが悪いのだ。

次こそは、念入りに警戒して、しっかりと殺さなければならない.....。

「おい、お前、何でそんな処にいるんだよ.....」

彼の顔は、蒼白になる。

黒いシャギーの髪型の女が、階段の下に立っていた。

ベレットは、思わず、ナイフを振り翳す。

彼は腕が動かせなくなる。

「.....？ 何でだよ.....？」

すぐに、彼は、今、起こっている事態に気付いたみたいだった。

「ああ、畜生。そこをどけよ。ふざけやがって」

女は唇を震わせながら、ベレットを凝視していた。

「……私、その……貴方を倒しに来ました。……その……」

……このままだと、全身を、固められるな。

ベレットは、一瞬にして、決断する。

彼は左腕で、腰に差したナイフを取り出すと。

一瞬にして、自らの右腕を切り落とす。

女は、それを見て、酷く驚いたみたいだった。

少しの間、宙に腕が静止していたが、すぐにそれが落下する。

ベレットは左手のナイフを放り出して、自らの右手をつかむと、切断箇所へと接合する。そして、元来た場所へと引き返していく。

女は狼狽しているみたいだった。それが彼にとっての好機だった。

おそらく、彼女から追撃される事は無いだろう。

元来た部屋まで戻る。

窓を開く。

そこは絶壁になっており、海が広がっていた。彼は身を乗り出す。空中を歩く。……。

十

花鬱とゴードロックが扉を蹴破って、中に入った後、カナリーと鉢合わせになって、三人とも驚愕していた。

「おい、お前、奴を見かけなかったか？」

「……いいえ……、お二人の来た場所に逃げたものだと……」

ゴードロックは、部屋の中を漁っていた。隠れられそうな棚などを開いていく。

花鬱はふと、窓枠を見ていた。

「何かしら？ あの血の痕……」

窓に、少しだけ血がこびり付いていた。

ベレットは、空気を固めて、空中を歩く事が出来る。

ゴードロックは、勢いよく窓を開く。

「畜生っ！ 外は海だ。きっと、あの海の中へと逃げ込んだんだっ！」

十

固めた空気に包まれながら、ベレットは海底の中を漂流していた。

今になって、切断した腕の痛みが激しく伝わってくる。

彼は憎悪を深く、心の中でたぎらせていた。

十

ベレトは波止場に辿り着く。

釣りをしている初老の男の横を通り過ぎる。男は海から上がってきた彼の姿を見て、怪訝そうな顔をしていた。

ベレトは港に置かれていた布をつかむと、自らの上に纏う。

しばらくの間、周囲を見ながら、彼は歩みを進めていた。

彼は港町で小さな電化製品のショップを見つける。

そして、通信機が売られている場所で、適当なものをスリ取る。

店を出た後に、彼は記憶している番号を入力する。

電話は繋がる。

「おい、デス・ウィング。お前、まさか奴らの側にも、何か力を貸さなかつたらうな？」

電話の相手は、何かを含むような言い草だった。

「まあいい。俺がこれから潜伏する場所を教える。畜生、自分で切断した腕が痛え。あちこち、骨折してやがる……」

十

「それで、スリ取ったお金で、この安ホテルに隠れているんですか」

「そうだよ。誰かが敵側に知恵入れしてくれたお陰でなっ！」

ベレトは、にやにやと笑っている、くすんだ髪のを睨みながら、果物を口にしていた。

リンゴにバナナ、ブドウにナシ。見舞いの果物を一通り持って、彼女は、この部屋に現れたのだった。デス・ウィングは律義な面もあるみたいだった。

「私は特に何もしてませんよ。あちら側に一人、興味のある人物がいたので、少し話を聞いてみただけです」

「それが余計だったんだろうよ、ああ、これは最低、二週間は戦えねえな」

彼は酷く、落ち込んでいた。

「何かあったんですか？」

「分かるだろ。あいつら、俺の塔に、俺の大切なコレクションに火を放ちやがったんだ。ああ、ふざけやがって」

ベレトは頭を抱えていた。

「いくつか押収したみたいですから、回収してきては？」

「後、二週間は戦えねえんだよっ！」

彼は思わず、悲鳴を上げていた。

「そうですか」

彼女は少し考えて、提案を行う。

「ベレト、貴方も、しばらくは、私と同じスタンスになりませんか？」

「どういう意味だ？」

「傍観者になりましょう。彼らの。きっと、面白い事が起こると思うんです。楽しいですよ」  
無邪気な言葉だった。そして、それこそが、彼女のスタンスなのだ。

自らは、あくまで彼女が言う処の、他人のストーリーの観客なのだ。

「少しだけならな……。だが、俺も参加するぜ、お前が言う処の劇役者にな。そうでなければ、この腹の虫が収まらない」

「そうですか」

ベレトは、バナナの皮を剥いて、それを口にしていく。

デス・ウィングは、ふと、敬語口調を止めて、神妙な顔付きになる。

「なあ、それと、ベレト。もう一つ、気になる事があるんだ」

「なんだ？」

「極めて、単刀直入に言う。シンプルな問いだ。そして、もっともお前の核心に迫るような問いかもしれない。脚色なく、答えて欲しい」

「いいぜ」

ベレトは、痛む右腕を見ていたが、それを止め、彼女と瞳を合わせる。

「私を殺害して作品にしてみたいと思うか？」

デス・ウィングは、無感情な声で、彼に訊ねた。

きっと、色々な者達に、同じような問い掛けをしているのかもしれない。

だが、彼の心の底を覗き込むには、充分な一言だった。

ベレトは首を横に振る。

「思わない。デス・ウィング、今や俺にとって、お前は俺の神なんだ。俺という神話を見届ける伝承者になって欲しい。俺は愛が何なんか分からないが、俺は絶対的な力に魅せられるんだ。お前がいなければ、俺は地を這うムシケラだった。初めてかもしれない。俺が自分以上に価値のある存在が出来たのは」

「錬金術師は？」

「あれは俺が力を得る為に必要な存在でしかない。奴は俺を評価しないだろう。だが、お前は違う。理解者になってくれる」

「ベレト、それは友情というものだよ。お前には分からない感情かもしれないが」

「そうなのか？ なら、そうかもしれない」

「カナリーというお名前なんですね」

彼は蒼いマントを纏っていた。

貴族風の装束を纏った青年だった。彼は自動人形だった。アンドロイドと言うらしい。

「貴方は……？」

「名前はラベリングによる標記しかないので、数字の羅列なのですよ」

「そうなんですね」

「私は自分が無いんですよ。自分を構成している自我のようなものが存在しないわけです」

まるで、鏡を見せられているようにも思えた。

自分自身だって、そのようなものだ。

「貴方は私の事をもっと知りたいですか？」

カナリーには、何を答えていいか、分からなかった。

「私は貴方に死を伝えに来たのですよ」

「どういう、……事ですか？」

自動人形の男は、柔和に笑った。

「貴方の事では無いですよ。貴方のご両親の事です。彼らは私の主であるフルカネリ様の住居に踏み行った。探索を行った。それはいけません。主は人間世界との交流を経ち、主要な実験は主自身が創造した『エトランジェ』の中で行われていますから」

「フル……？」

「けれども、偉大なる錬金術師であるフルカネリ様は、人間世界に御自身のお力を提供した者達を、何名も派遣したわけですね。次元の狭間に身を置く者なら、昔ながらの常套手段だとお聞きしています。自分の力を他人で使わせてみたい。そうすると、他者の人生を操作出来る喜びに駆られるのだそうです」

「……何を、何を言っているのか、分かりませんっ！」

「貴方のご両親は、フルカネリ様のお力をお借りした者達を、何名か殺害しました。それまでは良かったのですが。フルカネリ様の住居に侵入して、その場所を荒らし、あろうことか、フルカネリ様の正体を深く知ろうとしたのですよ。とても許されるべき事ではありません」

そう言うと、青年は、その場から去っていった。

カナリーの住む家は、山の中に包まれた場所だった。

此処からは、美しい街の灯が見えた。

まるで、人々を遠ざけるように建てられた家だった。

森や岩々といった、大自然に包まれた場所だった。

十

その夜、カナリーの住む屋敷は炎によって包まれた。

空から流星のように、そいつは降ってきた。

屋敷の屋根を四つの脚で砕いていた。

凶鑑でしか見た事の無い姿をしていた。

そいつは、巨大なカメレオンだった。

それは獰猛そうで、そしてとてつもなく狡猾そうな瞳をしていた。

カナリーは、自動人形の青年から、その時刻に、家から離れるように言われた。従う事になった。

見る見るうちに、家が燃え上がっていく。

父と母が、家の外に飛び出してきた。

二人共、異様な瞳をしていた。……今にして思うと、あれは闘う者の眼だったのだろう。

<我が名はダウンナンバー。お前達を始末しに来た。理由が分かるよなあ？>

しゅるしゅる、と、その怪物は舌を伸ばし、出し入れを繰り返していく。

「お前の主が遙か昔から生きている邪悪な存在である事は分かっているわ」

母親は、杖を手にしていた。

「お前の主に言うておいて、焼いた家、弁償しろって」

父の方は、両手を揺らめかせていく。

母の方も、強い視線で怪物を射抜いていた。

<俺は強いぜえ。何百年もの間、フルカネリ様の次元要塞の門番と、始末屋をやってきた生体兵器だからなあ。お前達じゃあ、この俺に勝てねえなあああ>

母が杖を振るう。

すると、燃え上がっていた炎が、木の枝によってかき消されていく。どうやらそれは巨大な樹木へと成長していつているみたいだった。屋敷の中から生えている。

樹木は、カメレオンを包み込もうとしていた。

突如。

カメレオンの姿が、視界から消え去る。

その姿が現すように、透明化を行ったのだろう。

突然。

母の全身が、いきなり発火を始めた。

同時に、あらゆる場所が燃えていく。

どうやら、見えない火の玉をまき散らしているみたいだった。

だが。

母の全身から、炎が消え去っていく。

「ダウンナンバーって言ったか？ この俺は大気を操る事が出来る。もう一度やってきてみろ」

父は小石をいくつも投げ飛ばす。すると、小石が周囲一帯を、くるくると、激しい速度で回っていた。

チュンチュン、と、金属音のようなものが、何も無い空間で放っていた。

ベグユリ、と、まるで硬いゴムでも破けるような音が響く。

カメレオンが姿を現す。

<やるじゃねえかあ。どうやら、雑魚では無さそうだなあ、おもしれよ、ああ、おもしれえ、なああああああ>

カメレオンの皮膚の一部から、血が滴り落ちているみたいだった。

キツタの刃が、この爬虫類へ向かっていく。

カメレオンは跳躍する。

そして、岩の一つに跨っていた。

<思い知れえ、何者もこの俺の空間を逃れる事が出来ないってなあ>

怪物は叫ぶ。

<『フェーズ・ダウン』>

ダウンナンバーの声は響く。

辺り一帯の空間自体が、まるで蜃気楼のように茫漠としていく。

カナリーには分かった、きっと、この辺りは別の異世界にされてしまったのだと。

そういう力を振るったのだろう、と。

父と母、二つの力を持つ者達は、驚きを隠せないみたいだった。カナリーもそうだった。二人共、自身の動きが鈍っているに、混乱しているみたいだった。

瞬く間に。

二人共、全身が炎によって包まれる。

カナリーは両親が黒焦げになっていく姿を、まじまじと凝視していた。

とてつもなく酷い臭気が、カナリーの鼻へと入ってきた。肉の焼ける臭い、こびり付いて離れない。

カメレオンは、口から火炎を放射していく。

辺り一帯が、炎によって包まれていく。

炎は、カナリーの近くまで這い寄ってきていた。この時、確かに死の恐怖を感じた。生まれて感じるものだった。後に、トラウマとして克明に刻み込まれてしまう程に。それは心臓を喰い破るようなもので、とても暗く重いものだった。

炎がカナリーの周辺にも来ていた。

動けない。

彼女の両足が炎に包まれていく。カナリーは思わず悲鳴を漏らしていた。

カメレオンは、彼女が隠れている事に気付いたみたいだった。

そして、加虐的な視線を送る。

<情報によれば、娘がいたんだよなあ。お前かああ？>

カメレオンは舌舐めずりをしていた。

<始末しないとなあ。血統も根絶やしにしてなあ>

怪物は口腔から炎を放つ。

その炎の量は、彼女を焼き殺すのに、十分な程のものだった。

カナリーは、何者かによって抱き締められていた。



それは、自動人形の青年だった。彼は背中を炎で焼かれていた。

背中への傷は酷い……、助からないだろう。

「貴方は……」

「終始見ていました。何故、私がこんな事をしているのか分かりません」

「こんな事していいの……？」

「駄目でしょうね。どちらにしても、私は任務が終わった為に、用済みとして廃棄処分される運命にありました。もしかすると、私は貴方の命を救う為に生まれてきたのかもしれませんが」

「貴方の、名前を聞かせて。名前、あるんでしょう？」

「DY-77000009-2234JD。それが僕に与えられた名でした。それ以上でもそれ以下でも無いのです」

青年の身体は崩れ去っていく。

<余計な事をおお。まあいい。この小娘は……>

カナリーは、咄嗟に近くにあったもので、カメレオンの攻撃を防ごうとしていた。どうやら、それはランプみたいだった。割れたランプだ。

それは、鳥籠の形に似ていた。

自動人形の青年が持っていたものなのだろう。ランプの灯を消して、隠れていたみたいだった

。

突然、カメレオンの全身が発火していた。

<おいしい、これ俺様の力だろ。お前、何をした？ 俺様もノロくなってやがる。どういう事だああ？ これも俺様の力だろお。ふざけんなあ、おいしいい>

割れたランプを、カナリーは必死で握り締めて、カメレオンへと向けていた。

<まあいい。生かしておいてやる。小娘が興味深かった場合、始末するなっても言われているからなあ。お前の事は見ていてやるよお。成人くらいまでなあ、楽しみにしてやるよお。てめえが、大人になってから、もう一度、てめえの面を拝みに行ってやるう>

……その後、何か閃光のようなものが見えた気がする。

カナリーは、呆然自失のまま、しばらくこの場を動けなかった。

その後、……記憶が途切れてしまっている。

家のあった山は、一夜にして、焼け野原になっていた。

何もかもを奪われてしまった気持ちだった。

カナリーが成人して、一年目を迎えた。

あのカメレオンは、未だに姿を現さない……。

## # 004 黄金の遺跡

---

「何故、人形作家になった？」

球体関節人形は、無感情な声で訊ねた。

メビウスとオブシダン、二人共、互いに背を向けた椅子に座っていた。

お互いの顔は分からない。

この部屋はそういう造りになっていた。

本来、懺悔室(ざんげしつ)だった部屋を改装した場所だった。

「幼い頃、私は寂しい子供でした。人形遊びが好きだった。それから動物も、私は私の心の奥底にあるイメージを形にしているのです」

彼女は顔を曇らせながら、言葉を押し出していく。まるで、自らの心の痛みを晒していくかのようだった。

「私は人形に魂があるとは思わない。それは空洞だ。私がそうであるように」

メビウスの言葉は、彼女にとって突き刺さってくるものだった。

まるで、他者への、過剰な希望や期待を塗り潰されるような。

「人形に感情があると思うのは、人形を見る人間の願望に過ぎない。あるいは作り手が自らの情念や思想を塗り込めているだけだ」

そう、まるで、自らの信仰を否定されるかのように、オブシダンは、メビウスの言葉が苦しかった。

「私には感情が無い。私は生命ではない。私は生きていない」

メビウスは無感情に、抑揚の無い声で、自らの事を言葉にしていく。

それは、とてつもない程の虚無の言葉だった。メビウスは自分自身の存在を肯定していないのかもしれない。

オブシダンは反論しようと思った。

「人間も同じでは無いのでしょうか」

「何故だ？」

「少なくとも、私自身、大きな何かがあるとは思っていません」

「人は自律して動く生命体だと、私は考えているが」

「人間も脳の電気信号によって存在でしかないのではないのでしょうか。人間が人間たらしめるものは、美や正しい価値を作って、あるいは感情というものや他人への愛が、人間という存在の価値なのではないのでしょうか」

「そうかもしれないな。私には何も分からない。何もな」

オブシダンは言葉に詰まる。

まるで、メビウスは、人間存在そのものに対して問いかけているかのようだ。……そんな事を答えるには、自分には荷が重過ぎる……。

「以前、何度か私の身体は戦いにおいて破壊された。コッペリアに私の身体の模造品を作って貰ったのだが、彼だけでは心もとない」

オブシダン、息を飲む。

「お前の作る作品には興味が無いが、お前の力には価値がある。私の肉体を作って欲しい」  
そして、メビウスは席を立つ。

「私の身体に触れてみるか？」

オブシダンは、メビウスの冷たい腕に触れる。

濁流のように、あらゆるものが心の中に入り込んでくる。

十

オブシダンは、人形に獣のイメージを組み合わせる球体関節人形作家だった。

毒々しい作品を作り続けていた。

ある時は、自らの性欲に任せてエロスをかき立てる獣の部位を持つ裸体の女を作った、またある時は、獰猛さと暴力性を持つ怪物の人形を作った。

それが、ある種の人間に似せた真理であると彼女は考えていた。獣性、エロティズム、崇高さと猥雑さ、この二つを併せ持った作品を作りたいと彼女は思惟(しい)していた。

メビウスは、本当にオブシダンの作家としてのアイデンティティには興味が無いのだろう。それは悔しかったが、同時に、そう告げるのも分かった。

人形作家を職業にしてきたからなのか、メビウスの身体から伝わってくるものはある。

そう。

メビウスの身体に触れた時に感じたイメージは、小さな光と果ての無い闇だった。

善と悪が、一つの作品の中に渾然一体となって表現されている。そのような感覚がした。

メビウスの身体は、今や、コッペリアの作ったボディだ。

彼からは人の温かさを感じる。光の柱のような聖性を感じた。

心の美しさとは、作品、作風に出るものだ。

だが、メビウスの肉体の底に感じるもの……。

元々、この肉体を作ったものは、人間の邪悪さの全てが詰まっているかのようなようだった。底の無い暗黒を感じた。根源的な悪が詰め込まれているように思えた。遥か地平線に広がる、果ての無い地獄が繰り広げられているかのようなようだった。

二つのコントラストは釣り合わない。闇と悪ばかりが、メビウスの肉体には刻印され、凝縮されているのだ。小さな天界の柱の周辺は、無限の地獄が繰り広げられているかのようなようだった。

そして、こうも感じるのだ。

絶対的なまでの実力の差、どうにもならない程に埋められない“作家”としての、創作者としての才能の差も感じるのだ。オブシダンのこれまで作ってきた作品の全てが否定されてしまうかのような、遥か高みを感じるのだ。

彼女はこれまで、小さいながらも熱狂的に支持されてきた。

メビウスの造物主への強い嫉妬。

それは、この世界全体の創造主への畏怖そのものだった。

それは、決して近付きたくもないが、同時に恋焦がれる何かでもあった。

きっと、メビウスの傍にいれば、否応でも、その輪郭(りんかく)を知る事になるのだろう。

十

メビウスはまるで盲信的なまでの、人間賛美の持ち主だった。

この生きた球体関節人形は、芸術の分野に何の感動も抱いていなかったが、人々がそのような行為を行う事を称賛していた。

彼女は彼女自身が述べるように何の感情も持ち合わせていなかったが、信念のようなものは持ち合わせていた。

それは、人間への、ある種、妄信的な敬意とでも言ったものだろうか。

オブシダンには分からない。

自分はこれまで、人でないモノに、人の形をした模造品に憧れ続けていた。

潜在的に他人の顔が怖かったのかもしれない。

少なくとも、彼女にとっては、人間というのは、理解不可能な不気味な者達ばかりだった。彼らと共にいると、いつもどこか落ち着かなかった。

それが、人間を厭世的に見る者と、人間に敬意を示す者の差異なのだろう。

メビウスが言うには『造物主』は、人間を人で無いプログラムされた機械に入れ替えようという計画があるのだと言う。人工生命体、メカニカルな脳、遺伝子組み換え技術、それらを構想し続けているのだと。

「何故、人間が社会や国家を形成して、法律を作り、経済を回していくのかに、私は興味がある。私には存在しない価値を求めようとするのか」

彼女の言葉は、オブシダンにとっては難しい。何故なら、オブシダンは、あくまでも、人形制作者、という小さな視点でしか世界を見る事が出来ず、ことさら学問の世界などには疎いからだ。

「お前は人間の条件とは何だと思う？」

「……………、私には分かりません」

「私は自律的に思考するべき事だと考えている。私はお前達人間で言う処の善悪の概念は分からない。だが、思考する事を放棄した時、その者は果たして人だと言えるのか？ と、私は考えている。それが生きているという事ではないのか？」

懺悔室のような部屋の外は、この施設の休憩室になっていた。

オブシダンは砂糖とミルクの多いコーヒーを口にする。

メビウスは砂糖無しの紅茶を口にした。

十

『ハンド・オブ・グローリー』のメンバーは、メビウスが言う処によると“可能性”なのだとの事だ

った。決して、みな、特別に、強力な能力を持っているわけではない。強さもバラバラだった。きっと、その差異に、メビウスは意味を有しているのだろう。

特別任務の内容は、主に二つある。

まずは、ドーンの手ハンターでは始末出来ない相手との戦い。そして、もう一つは、フルカネリの影響を受けている者達の調査、もしくは、討伐だった。

十

ベレトは、フルカネリの遺産を使っている。

多次元世界に開いた孔を通して、怪物達が、塔の中を彷徨っている。それが、オブシダンにのみ与えられた情報だった。

あの塔は、元々、錬金術師の残した負の遺産の一つなのだ。それを改装して、彼は使っているのだ。火にくべた後も、次元の裂け目から、新たに怪物達が入り込んでくるだろう。メビウスは別の栄光の手の部隊に、その辺りの事を任せると告げた。

ベレトは間違いなく、錬金術師フルカネリを崇拜している。

それは、メビウスにとっては、赦しがたい事象なのだろう。

フルカネリは、どのように、この世界に影響を与えてくるのかは分からない。メビウスでさえ、判断が付かない。ただ、造物主であるフルカネリの波動のようなものは、つねに感じ取っているのだという。

そして、波動を感じるのは、おそらくは予めメビウスに組み込まれたプログラムなのだろうと。

フルカネリが、どのようにして、この世界に仕掛けを配置したのかは、メビウスも把握し切れていない。何かに力を封じ込めて、この世界に、あるいは多次元のあらゆる世界に、バラ巻いていったのだろうか。

ハンド・オブ・グローリー……栄光の手にとって、オブシダンはとても重要な存在で、他の者達は言わば、まだ可能性でしかなかった。

それは矜持(きょうじ)にはならず、ただ、自分が突出して重い任務を背負っているのだという、ある種の息苦しさもあった。

ベレトは、未だ、その力が完成していない。しかし、完成してしまえば、とてつもなくこの世界にとって脅威なるものとなるだろう。

その前に、彼の命を終わらせなければならない……。

十

テラリスは直言すると、裏切り者だった。

彼は、栄光の手における他のメンバーとは違い、錬金術師フルカネリに近付きたがっていた。彼が元々、メビウスに近付いたのは、フルカネリの遺産を探っていて、ドーンの中核がフルカネ

りの創造物だという事に気付いた事だった。

理由が単純で、彼の探求欲は、メビウスの司令と、ドーンのランキング狩りでは満たせずに、フルカネリという強大なものの力を探索してみたいというものだった。

おそらく、メビウスは、既に彼を裏切り者だと見抜いている可能性が極めて高い。それ処か、初めからそれを疑っていた可能性も高い。けれども、自分は泳がされている。

テラリスは、いつか、彼女を出し抜いてやろうと考えていた。

十

アジトの中だった。

ゴードロックが、ベレトの私物を並べていく。

彼が様々な盗んだ美術品などもあった、主に骨に関するものだ。太古の人間の骨や、希少種の動物の骨、人体設計図などを描いた絵、とにかく骨に関するものを、彼はあらゆる美術館から盗んでいるみたいだった。……まるで、彼自身の創作物の参考にでもするかのように。

ゴードロックは、強い怒りを抑え切れないうみだった。

解体する為に使われた得物、謎の古本、動物の骨を使ったアクセサリー。

作品と称されていた、女の陰惨極まりない死体は、丁重に布に覆われていた。これは調査が終わり次第、警察機関に渡し、後に遺族の下に戻るようになるつもりだった。

軍人崩れの男は、死体を眼にすると、ハラワタが煮え繰り返っていくみたいだった。その度に、他のメンバーが冷静になるようになだめていた。

「複写したものだが、遺族の手紙を俺は受け取っている。奴が失敗作と称して、奴が作品と呼ぶものが、街頭に吊るされていたっ！俺はこの時の遺族の反応を知っている。犠牲者の母親は精神を病み、自殺未遂を繰り返していたっ！ベレトにさらわれ、殺害され、凌辱された他の者達の家族も同じだろう！遺体を見て、苦しみ、自殺を遂げる遺族もいるかもしれない。そういう意味では、奴の被害者は、更に多い！俺は奴のような人でなしを許すわけにはいかないんだよ！」

そう言って、大柄の男は、机を叩き続ける。彼のコーヒーの入った紙コップが転がり、中身が地面に滴り落ちていく。

花鬱とオブシダンは相変わらず、飄々とした顔をしていた。

ゴードロックは、軍人崩れである為に、このまとまりの無い面子に対して、いつも苛立ちを募らせていた。

カナリーは相変わらず、寡黙だった。

テラリスは、コンピューターに向かっている。彼は黙々と作業を続けているみたいだった。

「あの野郎、本当に許せんっ！それにしても、おめおめと逃げおおせやがってっ！」

「誰かさんが、ミキシングの仇と言って、塔に火を放ったから。手掛かりが幾つか焼け落ちた可能性もあるからねえ」

冷淡に言う花鬱に対して、ゴードロックは頬を引き攣らせていた。

そして、彼は、咳払いをして、とにかく今後の計画を練るように、と、一堂に言う。

カナリーは、テラリスが弄っているパソコンの画面に、ベレトの“作品”が映っているのを見て、陰鬱な気分になる。

「これは地図ですね」

テラリスが解析を終えたみたいだった。

それは、何なのか分からない石のブロックに謎の文字が幾つも描かれたものだった。

おそらく、ベレトは、この場所に興味を示していた筈だ。

何名かの賞金稼ぎハンター達に小金を握らせて、ベレトの塔の焼け跡を監視させていた。ベレトのコレクションの幾つかは、此方が押収してある。コレクターの性質からして、取り返しにやってくるだろうと、オブシダンが指摘してきた。

花鬱の意見は別だった、奴は、そんなに馬鹿じゃない、と。

テラリスが画面を動かしていく。

「メビウス様が探している『遺跡』の場所は、幾つかあるんだけどさあ。ベレトの持っていた情報によると、やっぱり複数、地図を見つけてるみたいだぜ、どうする？」

痩せた男は、他のメンバーに問いかける。

カナリーは、パソコンの画面に眼がいく。

何故だか、いつも手に持っている鳥籠が唸り声を上げていた。他のメンバー達は、その声に気付いていないか、あるいは気にしていなかった。

ぶぶっ、と、妙な雑音がする。

何やら、遺跡の画面にカメレオンの姿が映し出されていた。

「これは何ですか？」

カナリーは、テラリスに訊ねる。

「これか？ 遺跡の一つを守っている番人みたいだな。何だろうな、このトカゲの化け物は。...  
...確か、.....木とかに擬態する奴だっけ」

「その遺跡に行けませんか？」

カナリーは強い口調で言った。

ゴードロックも、花鬱も、彼女の言葉を聞いて、少し驚く。

彼女が、これ程、短くも強い意思表示の言葉を発したのは、初めての事かもしれない。

他のメンバーは、彼女の意見を尊重する事にした。

これまでずっと、無口だったカナリーが、初めて強く表明した意見だったし、どのみち、しらみつぶしに、遺跡を探索するしかなかったからだ。

十

『黄昏の大祭壇』。

地元の住民達からはそう呼ばれている。

何かの文化の遺物なのだろうが、その研究は進んでいない。

次元共通語が通じない区域だ。翻訳本も持ってきても、この地元の住民の言葉はよく分からない。ただ、遺跡には近付くな、という強い警告は行われる。

この辺りは、昔から忌み嫌われていたらしい。よく近付いた人間がいなくなるのだと。

メンバーは、近隣の村人達からは、十分な情報は手に入った。

能力者の大きな功績の一つは、あらゆる文化、国家間において、更に多次元世界において、共通の言語を創った事だ。それは、世界中に、多次元世界中に広がっている。おそらく、この功績を行ったのは、神に類する力を持った者だろう。

白いハトが、遺跡の入り口に止まった。

まず、テラリスが遺跡を探索する事となった。

援護として、オブシダンが、自分の獣達を送った。

十

「畏らしきものは、特に確認出来ないな」

テラリスは通信機にて、他のメンバーと通話していた。

彼の持つ通信機は、各々に电脑上でメッセージを送信、受信出来る機械だった。リアルタイムで、それが可能だ。たまに、不調を起こして、雑音が混じるのが玉に瑕(きず)だが……。

<何か生命の気配は無いのかしら？>

花鬱がメッセージを送信する。

<今の処、特に無いですね>

テラリスは返す。

<もう俺様が突撃していいのか？>

ゴードロックは相変わらず、血気盛んだった。

テラリスは、遺跡に描かれた文字を解読しようとしていた。

トーテム像のようなものも並んでいる。

彼は入口付近にまで近付いていく。

<何か嫌な予感がするわ。テラリス、戻った方がいいかもしれない。後は無人兵器として機能する、私の獣達に任せて>

オブシダンがメッセージを送信する。

<もう少しだけ入り込んでみます>

テラリスはみなに告げる。

十

テラリスは、仲間達を出し抜く事を考えていた。

フルカネリの力を手にしたい。それが彼の目的だった。

そもそも、メビウスなどのようなものに仕えていても、前途は有望では無い。ならば、もっと



権力に焦がれるべきなのだ。彼はそのように考えていた。

「ピラミッドの内部とかって、こんな感じだよなあ……」

彼は一人、呟く。

周辺に罨が無いが、自らが召喚したハトを飛ばして、感知していく。

後ろには、オブシダンの豹型の獣達が待機していた。

ハトは震えていた。

テラリスは、自らの軽拳妄動に気付く。……手遅れだった。

「ああ、クソオオオオオオオオオッ！」

彼は悲鳴を上げて、遺跡の外へと引き換えしていった。

濁流のように、その液状のものは、彼と、オブシダンの獣達を襲っていく。

十

双眼鏡を手にしながら、遺跡から離れた場所で、栄光の手のメンバーはその光景を眺めていた

。

遺跡の入り口に、深緑色の液体が流れていき、小さな河を作っていた。

中には、テラリスがいた。彼の全身が液体に絡め取られている。そして、徐々に彼の身体は、服は、溶解していき、テラリスは苦しみと救援の声を上げながら、内臓をブチ撒けて、骸骨化していき、ついには緑の液体と同化していった。オブシダンの獣達も同じ末路を辿った。

栄光の手のメンバー達は、それを見て啞然としていた。

きっと、大災害で、自らの家や街が、一瞬にして押し潰されたら、こんな感覚に陥るのではないだろうか。

ゴードロックは怒り狂っていた。

「ああ、ふざけやがって、また仲間が戦死……、ああ、クソがあああああっ！」

彼は、ミキシングの時と同じように、我を失っていた。

どうやら、緑色の液体は生きているみたいだった。

軟性の身体を震わせながら、また、遺跡の奥へと戻っていく。

十

ベレトは、更に遠い場所から、小型望遠鏡を使って、その光景を眺めていた。

そして、露骨に蔑みの視線を送る。

「馬鹿だな。しかし、『グリーン・スライム』か。それもかなりの大型の……」

ベレトは、自分だったら、引っ掛からないのに、といった顔をしていた。

「グリーン・スライム？」

傍らにいたデス・ウィングは訊ねる。

「知らねえのかよ？ アメーバ状の生物で触れたものを溶かすんだよ。おそらく、別世界から持

ってきたんだろ」

「ああ、文献で見たような。私も一つ欲しいな。瓶の中に詰めて売ろうか」

「売ってやれ。いっそ、買った奴を喰う仕様したらどうだ？」

「いいな、それは。だが、悲惨さをより良くする為に、購入者ではなく、購入者の家族や友人のみを喰らう、という仕掛けを仕込んで売った方がより面白いだろうな」

デス・ウィングの言葉を聞いて、ベレットは腹を抱えて笑った。

## # 005 錬金術の怪物

---

デス・ウィングは、あくまで傍観者だ。行動に移すのは、ベレットだけだ。

ただし、通信機による相談は受け取ると言った。

だが、彼はプライドが許さなかった。

あくまで、彼女の立場を重んじるつもりでいた。彼女は協力者ではなく、傍観者なのだ。

「俺ならどうにでもなるんだな」

彼は自身の周囲にある空気を固定しながら、グリーン・スライムの濁流を防いでいた。ただの一滴も、自身の身体に触れる事は無い。

空気を固定する事によって、ナイフやランタンの飛距離を伸ばして、辺りを探っていく。

十

祭壇があった。

何か異形の神像が建てられている。

悪魔や竜を象ったものなのだろうか、人型をしていた。

ベレットは、此処に来るまでに、様々な事を思索していた。

彼の目的はフルカネリと繋がる事だった。全知全能とさえ呼ばれる、遥か昔の錬金術師。そのような存在の力を手に入れる事だった。あるいは、そのものの配下になる事なのかもしれない。

.....配下、彼の人生においては、誰かの下に付いて動くなど考えられなかった。

やはり、自分以上の存在なんて無い。彼はそう思い、ナイフの柄を強く握り締める。

祭壇は、気配に満ち溢れていた。

「誰かいるのか？」

彼は訊ねる。

神像に、気配が集まっていく。一人ではない、確かに複数いる。

ずるずる、と、這いずるような音だ。

「お前は力が欲しいのか？」

気配は訊ねる。

ベレットは頷く。

「私はナヘマー。この遺跡の番人だ」

「何を守っているんだ？ 錬金術師の遺物か？」

石段や壁などを這いずる音が近付いてきた。赤い色の液体だった。血ではなく、まるで、リンゴやスイカなどのフルーツ・ゼリーのような赤だった。

赤い色の液体が、彼の近くに集まっていく。

それは、人の形へと変わっていく。

「お前が番人か.....？」

「そうだ。そして、お前を試す事にする。色は赤だ」

人型は、意味深な事を告げた。

十

カナリーは鳥籠をかざす。

何故だか分からないが。

すると、遺跡の周辺にいた、緑色の液体達は、身を引いていく。

他のメンバーは、みな驚いた顔をしていた。

「さあ、行きましょう」

花鬱も、ゴードロックも、驚いた顔をしていた。

だが、カナリーの言葉には、何故か強いものがあつた。元々、この場所は、カナリーが決めた場所だ。彼女には、未知の力がある。他のメンバー達も、それに何か畏怖のようなものを感じ取っていた。

十

「今回も厄日だ……っ……」

ベレトは、大気の盾を作って、敵の攻撃を防いでいく。

敵は、かなりの猛攻を行ってきた。

赤い球体が宙に浮かぶと、それが勢いよく破裂していく。

軽い小型爆弾クラスの破壊力はあつた。

辺り一帯の天井が、壁が、床が、破壊され尽くしていく。

大きな柱が倒れてきて、あやうく彼は、柱の残骸に当たって大きな負傷を受ける処だった。

「何故、我らの創造主の知識を欲する？」

液体の怪物は訊ねる。

「俺は俺の目的がある。だから、近付くんだよっ！」

ベレトは叫ぶ。

「俺には夢がある。俺だけの美術館を創るんだ。無限の時間に留められた美術品が陳列する空間をな。今の俺では、未だそれが叶わない。だからこそ、不死の秘密が知りたいんだ！」

ベレトの瞳は、焦燥さえ伴っていた。

何か自分のやってきた行為が、不完全なものでしかない、それ故の焦りなのだろう。

「この世界を俺の世界へと加工してやりたいんだ。支配するんだよ。お前のボスは、それを願ってきたんだろう。だから、俺は後追いをするだけだ」

魔人には、ある種の理想があつた。それ故に、このような場所で朽ちるわけにはいかなかった。

。

ベレトは、二つの小刀を握り締める。

そして、爆発の衝撃を、大気の固定によって、それぞれそらしていった後に。

破裂した瞬間の、赤い液体の幾つかを空中に固定していく。

十

カナリーを先頭に、花鬱とゴードロックは遺跡の中を進んでいた。背後には、三頭の豹が連れそっていた。

しばらくすると、行き止まりに突き当たった。

そこは、異形の神像が祭られた祭壇だった。

祭壇の前には、玉座が置かれていた。何者かが座っている。

生きた人間ではない……。

カナリー達は息を飲む。

玉座に座っているのは、朽ちたミイラだった。頭に王冠を被っている。

不気味さよりも、何故か、滑稽さを感じた。

「造物主さまを調べに来たのだろうか？」

ミイラは告げる。

「そうだっ！」

ゴードロックは叫ぶ。

「もうどれくらいの年月であろうか、吾輩がこの遺跡に入り込んだのは、かつての吾輩は栄光と名声を手に入れたい探検家だった。錬金術の知識に魅入られて、この場所を知った。吾輩は造物主さまの力を知りたいと思ったのだ」

奈落の底から響いてくるような声だった。

「もはや、今では、そう思わない。吾輩は造物主さまの世界に連れていかれた。そして、此処に戻ってきたのだ。吾輩は幸福になった」

ミイラは立ち上がり、玉座の背後に立てかけてあった槍を手にする。

「造物主さまに仇為す共を始末する。覚悟はいいか」

「上等だ」

ゴードロックが前に出て、機関銃を取り出す。

花鬱も、自身の能力を使い、無数の刀を生み出した。

ミイラに一切の攻撃の隙を与えるつもりなんて無かった。

機関銃と刀が、それぞれ、ミイラを撃ち抜き、切り裂いていく。

余りにも呆気なく、この敵はバラバラになって倒れた。

しばらくして。

部屋の四隅で、何か水が流れていく音がする。

「やはり、この男では役不足か……………」

何処からか、声が聞こえた。

「遺跡の王座につかせてやったが、役に立たなかったか。お前達は『黄色』が良いだろう。『緑色』はそのお前を畏怖しているみたいだからな」

「何だ？ 一体？」

ゴードロックが、銃を片手に辺りを見渡す。

黄色い二つの腕が、石畳の隙間から生え出してくる。やがて、それは一人の人の形を形成し始めた。

顔のパーツが何も無い、のっぺらぼうだった。

人型の黄色い塊は、全部で、四体現れる。

十

花鬱は、何度も、黄色い人型の塊を切り刻んでいく。

その度に、ぐにゃぐにゃと弾け飛びながら、再生を繰り返して、更に増殖を始めた。最初は四体だったが、今では二十体近くに増えている。

この敵は、斬って首を落とす事が戦法の基本になっている彼女にとって、勝利するには、不可能に近い相手だった。それでも、彼女は闘うと決めたみたいだった。

ゴードロックは、カナリーを連れて、別の場所へと向かわせた。二人で闘うよりも、むしろ、分断して、犠牲となる者を減らした方がいい。

そう。

栄光の手の任務は重過ぎる。

他にも支部があり、メンバーもすぐに入れ替わっていく。辞めた者も多いし、戦死した者も多い。中には、錬金術師に取り込まれた者達もいると言う。

それ程、『ドーン』にとっては、栄光の手は特別任務を請け負っている者達なのだ。

「成る程、成る程、成る程……」

黄色い人型達は、同じ言葉を唱和していく。

「お前相手には『青色』も必要みたいだな。これでは私の方ももたない」

どうやら、ひたすらに斬る事によって、ダメージは通っているみたいだった。同時に、他にも能力を持っているのを知ると、戦慄する。

花鬱の刀の一本を、黄色い人型の一人が受け止めていた。その人型の右手は、いつの間にか、途中から青色の腕が接合されていた。

「何……っ？」

彼女は少しだけ、動揺する。

それは、いつも、見知った形になっていった。

見る見るうちに、その人型は花鬱そっくりの姿へと変わっていった。

「お前の力の名を教えろ」

「『邪魅曼荼羅』よ。覚えておく事さね」

「そうか」

完全に、花鬱のコピーになった不定形だった存在は、何も無い場所から、幾つもの邪魅曼荼羅の刀を出現させていく。

「お前は私を倒せない。そろそろ終いにさせて貰う」

十

カナリーはゴードロックを連れて、走っていた。

「なあおい、お前はこの道を知っているのか？」

「……ええ、何故か見えるんです……」

大柄の男は、とにかく彼女を信じるしかないみたいだった。

神像があった。

どうやら、先程のミイラと、液体の怪物がいた場所にあった神像よりも、はるかに大きい。両手に壺を持っている女人の像だ。

「多分、……此処なんです……」

何故か、強い確信があった。

おそらく、此処が、この遺跡で、一番、広い空間なのだろう。

カナリーの持つ、木の鳥籠が、震え始める。

中で、何かが脈動しているかのようだった。

「おい、何かやばい事態になっているぞ？」

軍服の男は焦り始める。

辺りに、瘴気(しょうぎ)が漏(も)れ出しているような気がした。

木の鳥籠の扉が開いていく。

中から、脚が現れる。

それは、爬虫類(はちゅうるい)のような脚だった。

カナリーは怯えていた。

十

そこには、かつて幼い頃に見た、巨大カメレオンが姿を現していた。

<ようこそ、カナリー。大きくなったな>

カナリーは膝を付いて、仰け反っていた。

カメレオンは、舌の伸縮を繰り返していた。

怪物は全身から、あらゆる邪悪さを放っているかのようだった。

<俺はお前の“記憶”の中に閉じ込められていたんだよ。恐ろしい力だな。やはり、お前は造物主さまに仇(あだ)為(な)す者になるんだろうな。お前の両親がそうであったように。それにしてもだ。ようやく、出る事が出来た。あれから、十年以上も経過しているのか？>

その怪物は、二人を凝視して、吟味していた。

「なんだよ？ お前は？」

ゴードロックは、呆けたような顔をしていた。

しばしの間、事態を把握していないみたいだった。

「パソコンに映っていた、貴方の像は？」

＜お前が幻視したんだよ。俺はお前の行動を中から見ていたぜ。此処に集められた者達は、メビウスが作った、恐れ多くも、造物主さまに挑もうとする者達の集まりだろう？ みな、俺様が焼き殺してやる＞

「分からないが、こいつはお前の敵なのだろう？ なら、俺達の敵だっ！」

ゴードロックは、機関銃の引き金を引いていた。

カメレオン、ダウンナンバーの身体に弾丸は命中するが、弾き飛ばされていく。

怪物の皮膚は、鋼のように硬いみたいだった。

ダウンナンバーは、透明化する。

そして、嘲りの声を上げていた。

＜俺様は強いぜえ。造物主さまがお創りになった生体兵器の中でも、屈指の力だろうなあ＞

カメレオンは、二人の近くで姿を現し、口から炎の吐息を吐き散らしていく。

ゴードロックはカナリーを掴まえると、跳躍して、炎の攻撃を避けた。

＜また封じられないように、念入りにしておかないとな。もっと、恐ろしいものを見せてやる＞

怪物は口を大きく開く。

ダウンナンバーは、再び、火の吐息を吐く。

それは途中で、透明化していく。

ゴードロックは、蒼褪(あおざ)めた顔になる。

＜これで、避けようが無いだろお？ ほらほらあ、すぐに焼死体に変えてやるよ＞

十

壁に大きな衝撃があり、大きな孔が開いていた。

壁の一部全てが丸ごと、壊れていた。

花鬱は、何が起きたのか分からなかった。

「すげえ、勝手な事だけどよ。停戦協定を結ばねえか？」

聞いた事のある声だった。

花鬱は、一瞬、息を飲む。

何を言っているのか、よく分からないみたいだった。

「ベレット……………？」

「貴様らを追ってきたんだ。……まあいい。この部屋があったのに気付いたのは幸運だった。向かい合わせの部屋だったんだな。孔を開けた先にお前がいるなんてなあ」

「悪いけど、取り込み中なのよ」

「こっちもだよ」

赤い球体が、次々と、現れていく。

「何、敵を増やしに来たのよ！？」



「助けてもやるよ」

「あんたも敵だよっ！」

「やかましいっ！」

花鬱は、刀の一本をベレトの顔に向けた。

ベレトは、花鬱の肩に触れる。

和服の女は、迂闊さに気付いた。あの赤い物体は爆発するみたいだ。もし、動きを固定されれば、絶対絶命だ。

「こいつら、どうやって倒せばいいか分からねえ。どうすればいいんだろうな？ 取り敢えず、お前の周囲にも、大気の盾を張っておいたぜ」

「ふざけるんじゃないわよ」

花鬱は、怒りを露に、ベレトを睨む。

ベレトは、通路を遮る、三体の黄色い人型を小刀で切り付けていく。すると、彼らは固定されて、動きを封じられているみたいだった。

黄色い塊の代わりに、赤い塊が、花鬱の周辺で爆裂していく。

何度かの爆発の後、花鬱は、その場を動いた。

「あんた、最低な事に自分自身の能力を理解し切れていないのかしら？ あんたが、自らの周辺にある大気をあんたの力で、操作しているみたいだけど。あたしには、防御膜じゃなくて、タダの檻になってんのよっ！」

花鬱は跳躍して、赤色と黄色、両方から逃れる。

ベレトは、すでに、この部屋から離れていた。

「ははっ？ ああ、違うぜ。この怪物は何かを守っている。それを手にするのは、俺だけでいい。つまり、お前を一瞬だけでも騙したんだよ」

ベレトは、引き攣った声で反論する。

……………。

ナヘマーと言ったか。

赤色の方も、花鬱に押し付ける事が出来た。

結果的には、自分に有利な方に持っていった。

……本当に共闘するつもりだったんだよ。ああ、味方は俺の大気の固定を動かせねえんだな。俺がつねに、マスター・ウィザードの力で触れていなけりゃいけねえんだな。

そもそも。

彼は、仲間という概念が無かった。

いつも、私利私欲のみで生きてきた。だから、そういう能力が発芽した。

連帯なんて、そもそも出来るものじゃないのだろう。

ベレトの隣を、獣が走っていた。豹だ。

おそらくは、オブシダンの創り出す獣だろう。

「おい、やるか？ いいぜ、相手になるぜ。愛の契りを交わそうか？ 俺は人間しか趣味じゃねえんだけどなあ」

彼は獰猛な視線を、獣に向ける。

豹は、彼を攻撃せずに、まるで彼を誘導するように、通路を走っていた。

十

「なんだか、知らねえんだけど」

憎悪の籠った声だった。

カナリーと、ゴードロックは、自らに降り掛かる、見えない炎の攻撃が、自分達に届いていない事に気付いた。

何故か、負傷していない。誰かに助けられたみたいだ。

「よくも、俺の肋骨を折ってくれたよなあ。お前の方は、俺が自ら腕を切り落とす機会を作ってくれたよなあ。貴様らを情熱的に抱き締めてやりたい。解体したい、ああああ」

聞いた事のある声だった。

ゴードロックは、酷く驚く。

カナリーも、驚愕していた。

「なあ、おい、何故、貴様が此処にいる？ お前、今、我々を守ったのか？」

元軍人の男は、怨敵の意外な行動がよく分からないみたいだった。

石柱の上によじ登った、ダウンナンバーが姿を現す。

<何だ？ お前は？>

怪物も、突然の乱入者に、少し混乱しているみたいだった。

「まだ、満身創痕なんだよ、畜生。右腕もまだくっ付いてねえ、固定している」

彼は怒りの形相を露にしていた。

ベレトの背後から、豹が現れる。豹の口には小刀が握られていた。

この獣は、オブシダンの使う、人造生命体だ。

カメレオンは、再び透明化する。だが……。

豹は跳躍して、透明状態のカメレオンに、ベレトの刃を突き立てていた。豹は、反撃に、炎の吐息を受けて、火ダルマになっていった。そのまま、地面に倒れる。

獣はしばらくの間、痙攣を起こしていたが、やがて動かなくなっていく。

<おい、何をした？>

ダウンナンバーは、動きを止められて、混乱を起こしているみたいだった。

この巨体の怪物は、未知の攻撃には、脆いのもかもしれない。

ベレトは、空中を飛び跳ねていた。

そして、巨大カメレオンの眼球に向けて、刃を突き立てる。眼球は弾力を帯びて弾かれる。だが、彼はなおも、もう一方の眼球に刃を突き立てていた。

カメレオンは、舌で、彼を払いのけようとするが、ベレトの動きは早く、更に火炎の吐息の射程から離れた位置で、刃を振るっているみたいだった。

カナリー達には分かった。

自分達を、見えない檻が囲んでいる事を。

それをこじ開けるように、ベレットが中へと入ってきた。

「ははあ、お前達も、酷い顔をしているよな。今、此処で美しくしてやる」

ベレットの眼差しと口調は本気だった。

「はあ？ それ処じゃないだろう？ ふざけるのも大概にしろ！」

ゴードロックは、呆れ半分で怒鳴る。

ベレットは、栄光の手二人と、怪物、どちらを先に攻撃しようか考えているみたいだった。

突如。

炎の中から、豹が立ち上がり、三名の隣を駆けていく。

どうやら、それは通路の側みたいだった。

「ねえ、ベレット」

カナリーだった。

「三名で奴を倒す事を考えましょう。貴方は錬金術師フルカネリの力を欲している。私達はフルカネリをこの世界から抹殺する事を考えている。利害は対立しない。協力しましょう？」

魔人は、カナリーの顔を凝視していた。

「骨と肉を同時に切断される苦痛って、どれくらいのものか分かるか？ お前にこの痛みが、未だ続いている痛みが分からないのか？」

「……………、他人の痛みはまるで理解出来ない癖に…………、自分の痛みには、とにかく強く敏感なのね…………」

ゴードロックは、銃剣をベレットに向けた。

軍服の男には、栄光の手のメンバーの中で、彼にしか分からないような、強い呪詛を、猟奇殺人鬼に対して持っているみたいだった。

「お揃いね」

草鞋(わらじ)の音がする。

赤い着物の女が現れた。

彼女は部屋の中央に入る。燃え盛る豹が、彼女の隣にはいた。豹は役目を終えたかのように、その場に倒れる。

そして。

花鬱は、怪物達を連れてきていた。

赤色に青色、黄色に緑色の塊が、無数に通路の奥から歩いてくる。

かなりの量だ。

<『メモワール』、精霊体ナヘマーか>

ダウンナンバーが言った。カメレオンの眼球は、カナリー達の方角で固定されていた。

<邪魔するんじえねえぞ。こいつらは俺を馬鹿にした。俺が焼殺してやる>

このカメレオンは、露骨に、眼の前にいる軟体に嫌悪を示しているみたいだった。

「これはこれは“やっかい者”のトカゲ、ダウンナンバー」

カメレオンは、明らかに顔を険しくしていた。

「造物主さまの特別な存在であると自負するのはお止めなさい。貴方は傲慢が過ぎた。なんなら、彼らと共に、この私が始末しましょうか？」

塊達は一斉に嘲笑しているみたいだった。

無数の塊は一つになっていく。

おそらく、ゆうに数百体に達していたのではないだろうか。それが一列に、堆積が増える事無く、一つの人型に融合していく。

四色の色彩が、どろどろに混ざった、一人の人型になった。

目も鼻も口も無い顔が、頭を震わせていた。

<おい、カナリー。てめえ、やれよ>

ダウンナンバーが、意外な事を告げる。

<この場を収めてやる。俺は去るぜ。妥協してやる、てめえ、その鳥籠を開いて、その気持ちの悪い粘液野郎に向けろ！ 分裂する前だ！>

ダウンナンバーが叫んでいた。

カナリーは、思わず、彼の言葉に従っていた。

木の扉が開かれる。

四色の人型は、よく分からないみたいだった。

おそらく、閉じ込められていて、あのカメレオンは鳥籠の構造、カナリーの能力の大部分を理解しているのだろう。

それは、何本もの腕だった。

粘質の人型、ナヘマーを掴み掛かろうと迫る。

ナヘマーは、それに気付き、すぐに分裂に走る。

だが。

腕達は一瞬にして、煙へと変わると、壁や床の隙間や、通路などに逃げようとする液体の塊をつかみ取って、鳥籠の中へと“収納”していく。

まるで、嵐が去った後の静けさだった。

一同は、しばらくの間、カナリーと、閉じられた鳥籠を眺めていた。

<どうやら、そこのオカマ野郎の能力も解けたみたいだな。カナリー、俺はお前以上に、お前の力を知っている。今日は此処で一度、引いてやる。ああ、引いてやるぞ>

ダウンナンバーは天井に両脚を付けると、舌によって天井を破壊していく。そして、大きな孔が空くと、彼ははずこへと去っていった。

ベレットが全身を震わせて、怒りを露にする。

「ああ？ 誰がオカマ野郎だって？ 殺してやる、苦しめて、生かしながら殺してやる、気色悪い体色の化け物が」

ベレットは、跳躍して、まるで底に見えない透明な階段があるかのように、空中へと着地しながら、ダウンナンバーの後を追っていった。

## # 006 代償の鳥籠

---

錬金術師は、果たして、この世界にどれだけの影響力を持っているのだろうか。

それは酷く未知数だった。

.....

ゴードロックは、オブシダンに、彼女の作り出す獣の人形達は、彼女自身の意思で操っているのかと訊ねた事がある。オブシダンは首を横に振った。獣達は自らの自立した意思を持つのだと。

魂なるものが、この世界にあるのかどうかは分からない。

幽霊なる存在はあるが、それはタダの精神の残滓でしかないのではないのか。この世界の幽霊達は、能力者になるように、別の存在になったものであって、人間に魂というものがあるわけではないのではないのか。不滅なる靈魂が存在するわけではないのではないのか。

オブシダンは、そのような事を、粗暴な軍人崩れに語ったのだった。

ゴードロックは分からない、と答えた。分からないけど、人の意思を信じている、と、彼は答えた。

生命を創り出すとは、どのような事なのだろう。

オブシダンは分からないのだと、軍人崩れに言う。

自分達が追っている錬金術師は何を思い、この世界に人工生命体をバラ撒いたのか分からない

十

<愚かだな、人の子よ。お前がどれだけ異常であったとしても、所詮、人間の女の腹から生まれた人の子に過ぎんのだよ>

怪物は蔑みの言葉を放つ。

絶壁だった。

滝が流れている。

遺跡からしばらく離れた場所だった。山岳だ。

透き通った水の流れる滝だった。

空が晴れ渡っている。まだ、真昼時なのだ。

ベレトとダウンナンバー、魔人と怪物の二つは対峙していた。

それぞれ、相手の動きを待っていた。

「ああ、殺してやる。殺してやるぞ、お前も、あの連中もだ」

<俺も同じ気分だが、お前は一人で奴らを殺さないと気がすまないらしいな>

心なしか、カメレオンも、怒りに震えているように思えた。

ベレトの瞳は野望に燃え盛っていた。

「フルカネリの知識が欲しい。俺は人の世界を支配したいんだ。お前の王様は人の世界を征服す

る道理を知っているんだろ？ 分かっているんだぜ？ それはとっても、快樂なんだろ？ せめてお裾分けしろよ。独占するなんて、許さねえ。楽しいんだろうな、それは、本当に楽しいんだろうな」

ベレトは、怒りと憎悪が限界に達しているみたいだった。おそらくは、前回の傷が身体に残っている為に、絶えず憎しみに晒されているのだろう。

だが、それ故に、力は増幅しているかのようだった。

彼は両手に握られた小刀からは、その力が具現化していた。

まるで、虹の帯のように、くるくると、彼の周辺を光の環が舞っていた。

ダウンナンバーは眼球をくるくると動かす。

<俺の本当の力を使ってやる。光栄に思え>

空間が歪み始める。

カメレオンが足踏みする、岩の一部が、滝から落下していく。落下速度は、スローだった。この辺り全体で、動く物体の速度が遅くなっているのだ。そして、ダウンナンバーだけが、この遅延空間において、通常で動く事が出来る。

<俺の『フェーズ・ダウン』の空間に巻き込まれた者は、ほぼ死ぬ。俺に傷を与えられないのだからな。お前は空気も含めた物質を、固定する能力みたいだが。俺は空間自体を遅延させている。果たして、お前の力で、俺に触れる事が出来るのかな>

ベレトは背後に飛んでいた。

動きがスローになっていく。

<焼け死にやがれっ！>

ダウンナンバーは、口から火炎放射の吐息を吐く。それは、空気の盾によって弾かれる。カメレオンは少し機嫌を悪くする。

<ああ、ウンザリする奴だなあっ！>

ダウンナンバーは、透明化して、跳躍する。……だが。

空中で、何かに当たった。見えない天井があった。

そのまま、バランスを崩して、彼は、滝の下へと勢いよく落下していく。

<ああ？ ふざけやがって、おい、人間ごときが、ああ、この俺様を出し抜くだと。無いな、その煩わしい見えないものを壊して、お前を丸呑みしてやろうか！>

ダウンナンバーの腹に、何かが突き立っていた。

滝の真下辺りに、ベレトは、更にナイフを落としており、それは天に向かった形で固定されたのだった。

ナイフはスローのまま、ダウンナンバーの腹を突き破っていく。銃弾も通さない、彼の強靭な皮膚を持ってしても、折れる事の無い強靭な刃だった。

そのまま、ダウンナンバーの全体重が、折れない刃へと押し掛かっていく。ついに、カメレオンの腹は裂け始めていた。彼にとっての完全な誤算だった。ナイフは、腹の中へと入り込み、次は背中を破り始めていく。

<ああ、ああ、『フェーズ・ダウン』をか、解除しないと、と……>

彼は錯乱していた。生体兵器と言えど、痛覚は存在していた。スローで身体を破壊してくる攻撃に耐えきれなかった。

腹の中で、未だ、ナイフが固定されて、ダウンナンバーを宙ずりにしていた。彼は早く、ナイフが背中から飛び出す事を考え、この時ばかり、自らの肉体の頑丈さを呪った。

ダウンナンバーは、一度、滝壺に落下した後に、態勢を立て直すつもりでいた。

スロー空間を解除された、ベレトの動きは素早かった。

まるで、ナイフを固定した空気の棒で伸ばしながら、蜘蛛の糸のように、振り子のように、ナイフをダウンナンバーの喉下の辺りに放り投げていた。ナイフは垂直ではなく、斜めに固定される。

<あああ！？>

固定されたナイフが、今度は、ダウンナンバーの胸を削りながら、喉に潜り込んでいき、そして、頭蓋の辺りを突き破っていた。

巨大カメレオンは、そのまま、滝壺の中に沈んでいき、やがて、濁流によって流されていく。彼は舌打ちし、身震いを始める。

「……しまった、奴から錬金術師フルカネリに近づく手掛かりを聞き出すのを忘れていた」

断崖の地面に戻ったベレトは、少し悔しそうに、未だ痛み続ける右腕の接合面を眺めていた。

十

「本当に覚えていないんです」

カナリーは、栄光の手の他のメンバー達に告げた。

彼女は酷く辛そうな顔をしていた。

「ベレトの事も、彼と戦った塔での出来事も、遺跡での出来事も。そして、貴方達の事もです。メビウスに会ってから、栄光の手のメンバーと合流するように言われた事までは覚えています。……此処、十日くらいの記憶が抜け落ちてしまっています」

カナリーは、とても悲しそうに言う。

オブシダンも痛々しそうに、彼女の顔を見ていた。

彼女は美術を愛でる、人形作家であるが故に、他者への感情移入する力も、人一倍強いのだろう。

「重い代償のようね。普通の能力者には、そんなものは無い。貴女は何か特別なのでしょうかね」

「私はオブシダン。人形作家をしているわ。そして貴女と同じ能力者……」

メンバー達は、それぞれ改めて自己紹介をしていく。

カナリーは、とても哀しそうな顔になった。

十代から、何度も何度も、記憶が抜け落ちていっている。

それは、力を使ったからだという事は分かっている。

人生の一部が無くなったのだ。

言葉に出来ない程の虚無が渦巻いていた。

精悍な顔をした大柄の男、ゴードロックは、カナリーの手を強く握り締める。

「メビウスさまは、また別の司令を出してきたが。俺は、個人でベレットを始末する事に決めた。もしかすると、この支部のリーダーは、俺ではなく、花鬱が引き継ぐ事になるかもしれん」  
「……………辞められるのですか？」

「まだ、それは分からない」

アジトの外に出て、しばらくの間、カナリーは、何故かこの軍服の男の後に付いていた。

三十分程、街を歩いた処だろうか。

そこは有名な企業の経営する喫茶店だった。

その中で、何名かの人物達が、この大柄の男を待っていたみたいだった。

大柄の男は、待ち人達に軽く会釈して、胸を張る。

「私はベレットと戦います。たとえ、この命を落としたとしてもっ！ 私自身、同僚を殺されました」

顔に多く白髪が混ざる女性や、妻が重い精神病を発症したという中年の男などがいた。どうやら、猟奇殺人鬼ベレットの被害者家族のようだった。先日、心ない住民達からの嘲笑の手紙で追い打ちを受けて、ついには自殺を遂げてしまった被害者の妹の話をしていた。中には、夫が、娘を殺されたショックからアルコール依存症になり、ついには心不全を起こして死亡し、一家の大黒柱を失ってから、十に満たない残りの二人の子を一人で養い、かさむ借金に苦しむ中年女性もいた。

ありとあらゆる負の感情を、ゴードロックは、快活な顔で、一心不乱に受け止めていた。

カナリーは、居た堪れない気持ちになって、ゴードロックに会釈をすると、店を出た。

ベレットが殺して、作品にした、凄惨極まりない死体の記憶も……、綺麗に抜け落ちてしまっている。

十

「見事、あのクソトカゲから聞き出す事には失敗したよ。ああ、愛と憎悪を織り交ぜたアフォリズムを綴ってやりたかったのに、クソ、畜生が」

「逃げられたんですか？」

「ああ、まあ生きているか、死んでいるか分からねえがな。引きずり出せなかった」

ベレットは、殺害して、解体して、作品にする事を、よく恋愛になぞらえる。

彼が他者に愛情を抱けない故の、皮肉なのだろう。

日の光が暖かい。

浜辺の波の音がする。潮の匂いが芳しい。

海辺付近の安ホテルに、二人はいた。

今日、此処をチェックアウトするつもりだ。

「そうですか。御自身の目的の手掛かりになると思ったんですか？」

「ああ、なったぜ……」



彼は不敵な顔をしていた。

「貴方は何故、フルカネリに近付きたいのですか？」

「最高のアーティストだからに決まってるだろ。尊敬するミュージシャンに近付いて、それを真似してえんだよ。複製したい。俺はもっと芸術家としての高みに行く。つまり、そういう事だろう？」

それを聞いて、デス・ウィングは腹を抱えて、笑い転げた。

そして、商売上、癖になっている、敬語口調を止める。

「成る程。やっぱり、お前は私の見込んだ通りだ。これからも、お前の物語を見たいよ。どんな作品を創っていくのか、これからも私に見せてくれ。良い作品があれば、高値で買い取りたい。売るのもいいけど、私個人のコレクションにもしたいからな」

彼女も、とても楽しそうだった。

「デス・ウィング……。やっぱり、お前は、俺の至高の理解者だ」

「ああ、これからも、お前の作品とストーリーは観させて貰うよ」

そして、彼女は一筋の旋風になって、彼の下から去る。

ベレトは、未だ痛む右腕をさすりながら、海辺の宿を後にする。

白いドレスが、潮風に揺れていた。

彼は愛情や友情を感じる事なんて出来ない。他者への共感能力も強く欠如している。他人の痛みに対して無理解だ。それでも、デス・ウィングは、彼のような“創作者”を気にしている。

「あのような人間がいるから、まだこの世界は面白いな……」

デス・ウィングは、彼のようなクリエイターを強く応援していた。たとえ、どれ程、社会秩序的に見て異常でも、道徳的に見て非人道であったとしても、彼に素晴らしい作品を創り続けて欲しいし、更なる高みを目指して欲しいのだ。

デス・ウィングは、悪なる意志が好きだった。

それを見届ける事によって、何か綺麗なものや、神聖なものを見ているような気がするのだから。

十

カナリーは、再び、メビウスに会いに行く。

繁華街からは、少し離れた場所だ。

今度は、マネキンの廃工場だった。

今は、資材があらかた片付けられているみたいだったが、所々に朽ちたトルソーや人形の頭などが入った籠が置かれていた。

ブーツの靴音が鳴り響く。

メビウスの服は、相変わらず、闇に溶け込んでいた。記憶が抜け落ちているので、つい、二、三日前に会ったばかりだという感覚だが、あれから二週間以上は経過している。

無感情な二つの眼が、カナリーを見つめていた。

「御久し振りです」

カナリーは、会釈する。

メビウスは無機質な顔で、彼女を吟味していた。

「その木の鳥籠は興味深いな」

カナリーは返答に、少し困る。

「何か別の化け物を閉じ込めたのだな？ フルカネリの創造物を」

メビウスは問う。

「今や、フルカネリのデザインした人工生命体達が各地で動き出している。お前には、始末人として動いて貰いたい。どうする？」

覚悟に対する確認だった。

それは、今後も、カナリーの記憶が消えていく事を示唆した。

仲間達との思い出も、戦死した者の悲しみの記憶も分からない。

全ては抜け落ちてしまっている。

鳥籠は、カナリーを襲撃する敵からの攻撃を覚えていて、それを中に溜め込み、再現する事は可能だ。彼女はかつて、自分がどんな者達から襲われたのか分からない。記憶は何処かへと消し飛んでしまったのだから。

言い表せない苦痛だった。

「私は無能なんです」

カナリーは首を横に振った。

「この鳥籠の中には、たった、“一体の生き物”しか入れる事は出来ないみたいなんです。遺跡の中で出会った粘質の怪物が今、入っているみたいです。だから、もう使えません。私は役に立てないんです」

「一体入れば充分だ。入れる度に、私の下に来ればいい」

メビウスは、カナリーの力の秘密に、何の動揺も示さなかった。

「籠を開けてくれないか？」

カナリーは頷く。

鳥籠の扉を開いていく。

中から、粘質の怪物ナヘマーが姿を現す。

彼は、呆気にとられているみたいだった。

そして、すぐに状況を理解する。ナヘマーは分裂を始めていく。

メビウスは、有無を言わせなかった。

軟体の怪物は、何もする事が出来なかった。

まるで、風が通り過ぎるように、その攻撃は巻き起こった。

ナヘマーの身体が千切れ飛び、ねじられ、凝縮され、弾け飛び、限りない塵へと、無へと向かっていく。

メビウスの力だった。

圧倒的で、絶対的な力だった。

「私の下に来ればいい。その度に、私が始末を終える」

十

オブシダンが、車で待機していた。

「お互いに重い任務を授けられたわね」

「ええ……………」

赤茶色の車だった。ブランド名は知らないが、高級車なのだけは分かる。

オブシダンは、給与として、カナリーに封筒を渡す。それなりに多い金額が入っていた。

「これから、食事に行きましょう。私が奢るから」

「ありがとうございます」

「ふっ、……ベレットとの戦いも覚えてないのよね。四日前の貴女は、もう少し、この私と打ち解けていたわ」

カナリーは、オブシダンの右隣の席に座る。

ラジオから、聴いた事の無いポップスが流れる。よい曲だ。もしかすると、いつか聴いた事があるかもしれない。けれども、それは失われてしまったのだ。これから食べに行く料理の味も、思い出も、力を使う事によって、消えていくのだろう。

記憶が貪り喰われていく。

いずれ、自分は何もかも、消え去ってしまうのかもしれない。

いつか、自分の全てが削除されてしまうんじゃないだろうか。

窓ガラスから見える、街の景色が移り変わっていく。

全ての記憶が空白になってしまった後、自分はどうなるのだろう。何度も、何度も、仲間達の事を覚えては忘れていく事を繰り返していくのだろうか。メビウスの事も、両親の事も、忘れてしまうのだろうか。

自分の力は、代償が大き過ぎる。

いつか、自分が真っ白な程に、消えてなくなる日がくるのかもしれない。

記憶が無い人間は、思い出が無いという事だ。果たしてそれは、人生を生きていると言えるのだろうか……？

「また、貴方の事を忘れてしまうかもしれません」

カナリーは、ポップミュージックを聞きながら、そんな事を呟いた。

「そう。なら、またお互いに自己紹介をしましょう。何度でも……」

街の景色は明るく、人も娯楽施設が多く、病的な程の黒尽くめの格好をしたカナリーには、とても場違いなものを感じていた。

END